
まぶ錬！！

デボエンペラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まぶ錬！！

【Nコード】

N3801R

【作者名】

デボエンペラー

【あらすじ】

錬金の戦士達がホムンクルスと戦ったり遊戯王で遊んだりデビルキシャーに追われたりする小説です。今後ともよろしく願います。

スパロボ形式のクロスオーバー小説です。
たまにガチだろぅが日常だろぅが遊戯王やってたりする小説です。
この小説は堕ちた天使の世界と言うサイトにも投稿しています。

第0話 錬金の戦士

錬金術――

近代より前、全ヨーロッパを風靡した原始的な総合科学技術。

目的としては主に3つ。

鉛から金への変換。

かつて神秘がこの世界の全てを支配していた時代ですら、サイフ
オン・ドラクール・ミハイロフの魔道三大家しか成し遂げられな
かった不老不死。

そしてあらゆる奇跡をもたらす完全なる賢者の石の創造。

これらは成功しなかったが種々の技術の発達を促し、近代→現代
科学の基礎となった。

だが――

天上に満月が浮かび上がっている闇の中、ある廃ビルの中で複数の人間がいた。

「さて皆さん」

窓ガラスが割られた窓辺にたたずんでいる七三分けの進学校の制服を着た青年と、10人いる集団の中から代表として見るからに陰気そうなやせ細った男だった。七三分けの青年がやせ細った男に向かって声を上げる。

「早く獲物を見つけてください。 “東” に来て最初の食事です。それが楽しみで想像すればするほど興奮してきますよ」

青年の声に対して男は仰々しく跪く。

その動作には明らかに心が籠っていないかったが、それを目の前の青年が気にする事はまずない。

「わかってますよ我が偉大なる指揮官さま」

男がそう言っていると指揮官と呼ばれた青年は若干不機嫌そうに鼻を鳴らす。

だが、跪いた男の目は明らかに指揮官に対しての侮蔑や嫌悪、果ては怒りや憎しみすら感じられる。

しかし、青年はそれに気付いた様子すら見せずに淡々と周囲をうるついで言い放つ。

「狂いきった奴らの巣窟の “西” や神城や杜崎がいる “南” の連中からようやく逃れることができましたね。最初ですから慎まし

く行きましよう、それ以前にがつつくのは“西”にいるような下等生物のすることですからね」

己の声に陶醉しきった様子で両腕を広げる青年。この青年は自身以外の者を全て下等生物呼ばわりする考えの持ち主であった。彼の目の前にいる自分自身や敵対している錬金戦団の戦士たちはおろか、例えそれが自分の仲間や果ては組織の指導者ですら例外ではない。むしろ彼は指導者を倒して組織を我が物にしようと思っただけでいい。い込んでいた。

「だがなあ……」

だが不意に青年の表情が徐々に強張り、そして顔が完全に怒りに染まると男を掴みあげた。

男たちも立ち上がるが、青年は仲間を掴んだまま飛びのいて手の届かないところまで移動してしまう。

「な、何を……」

「手前らクズどもが馬鹿やって“西”の奴らを潰け込ませる事になったから態々“東”にくる羽目になったんだろっが！！ 何度も何度も俺の足を引っ張りやがって！！」

その表情は最早化け物のそれに近くなってきた。特に口元は明らかに頬の辺りまで裂け、化け物特有の『それ』になっている。

「戦闘能力が高いってだけでエリート中のエリートである俺を見下していた馬鹿もだ！！ 俺に厄介事押し付けて勝手に死んでんじやねえよ！！ くそっ！！ どれもこれもエリートの俺を嘗めやがって！！」

怒りに任せて男の顔を掴む青年。男は仲間を救おうと即座に走り出すが、距離がいかにせん遠い。

元々いた共同体では青年の人望は無く、他のホムンクルス達が殲滅されていく中、お情けで共同体の幹部の地位にいただけの男だった。戦闘能力も他のホムンクルス以下で、核鉄に適応できなかった存在でもある。

「しょ、しょうが、ないですよ……不意を突かれたんですから……」

「何が言いたんだよ……」

「そ、それに“北”だって“西”にいる集団以上の残忍さを誇る七人組がいるじゃないか……『護曉』って言う凄腕の退魔師集団がいるから安心とも言えないし、そいつらだって“東”に進出してるじゃないか……」

“東”だって安全とはいいがたいし……」

その言葉を最後にやせ細った仲間の身体は自分の目の前で粒子状に分解され、そのまま青年の掌の中に吸い込まれて消えていった。

また仲間が1人減った。その事実に絶望する中、青年は口元から唾を吐き出して地面を蹴り飛ばした。

「けっ！ 手前らのようなクズの代わりなんざいくらでもいるけど、エリートのは俺は1人しかいないんだ……手前らは俺を護つてりゃいいんだよ……さっさと餌を見つけてつれて来い、いいな……」

そう叫んで青年は姿を消し、残された面々も喰われた男の衣服を持ってこの場から姿を消した。

「くそっ！！　アイツ、俺らを何だと思ってるんだ！！」

彼らは悔し涙を見せながら夜道を歩いていた。男も同じで顔をうつむかせ、拳を力強く血が出るといわんばかりに握り締めている。

自分たちのいた共同体のリーダーには恐怖を感じていたものの、それ以上の忠誠を誓っていたが青年の横暴な態度に対して怒りを覚えていた。

彼は正々堂々とした戦いを好み、変わった服を着た男との三日三晩に及ぶ格闘戦の末に敗れ散っていった。

幹部たちはあの青年を除いて次々と倒されていった。

だが青年の横暴によって死んだ“仲間”たちは2桁を超え、先ほど1人減って残りは1桁となった。

そして今や自分たちのリーダーと同じ存在はあの青年以外いないのだ。それが青年の横暴を増徴させ、彼らは事あるごとに数を減ら

していった。

「もう、錬金の戦士に降伏しようかな……」

「馬鹿か！！ 降伏したって連中は助けてくれやしねえぞ！！」

自分が声を荒げると周囲の声も窄んできた。だが周囲から弱弱しくもしつかりとした声が上がってきた。

「でもさ、どっちにしても僕らは遅かれ早かれ死んじゃうんだぜ？ やつらに殺されるか、あいつに殺されるかの違いだよな？」

「大体“西”の奴らにばれたのだって奴が原因じゃないか……」

「もういやよ！！ 私はあの方には恩義があるけど、あいつはただ威張ってるだけじゃない！！ アイツに捕まった時、仲間が何人喰われたと思ってるの！？」

その言葉を切欠に周囲の反応は大きくなった。

自分としてもその気持ちは強かったので、彼らの声を止めようとも思わなかったのだが自分たちと彼では勝負にもならないのは事実なのだが。

「そうだ！！ あの方は最後には俺らを自由にしてくれたんだ、もうあんな奴に従う必要なんてない！！」

「どうせ今以下は無いんだ、徹底的に暴れてやる！！」

「確か奴はあの方が使っていた力を持って無いんだ！！」

叫び声をあげる面々。だが自分は彼らのまとめ役ゆえ、特攻して全滅してしまうという事態を防ぐために声を荒げて彼らを諷める。

「俺だってお前たちに賛成さ！！ だがな、相手はあの方と同じホムンクルスだぜ？ どうやって倒すんだよ？ そこまで言ったか

らには自信があるんだろうな!？」

その言葉で再び押し黙ってしまう。そんな中――

「あの、すみません」

聞きなれない声が響き、彼らは一斉に声のした方向を振り向く。
そこにいたのはどこにでもいそうな1人の少年だった。

「さっきの話、僕にも詳しく教えてくれませんか？」

1人の青年の、弱弱しくもしっかりとした声が響き渡った。

「遅い」

青年は腕を組みながら外を見ていた。あまりにも遅すぎる。もうすでに1時間近く過ぎたはずだ。普通ならば逃げたと思い追うはずなのだが、彼にはその様子はおるか慌てる素振りすら見られない。

まず普通の人間に助けを求めたところで、与太話だと受け取られ一笑されておしまいだと言うことがあげられる。

だが、そこから鍊金の戦士に情報が行き渡る可能性を考えれば追うのが正しい選択肢なのである。

今までならば権力を持つ配下を使って揉み消したり握り潰したりすればよかったが、そいつらは軒並み警察に検挙されたから早急に対処しなければならぬはずだ。

そこで彼の性分……『自分以外の存在は下等である』が出てくる。

「ま、最初から下等生物に期待するだけ時間の無駄ですか。生まれも僕と違って貧相ですし」

元々自分は資産家の家に生まれた存在だった。さらに成績も優秀で、誰にも負けた事は無かった。

そんな自分が人間を超える存在になるのは必然だった。

偶々家の倉庫にあった資料の断片を使い、7歳の頃から10年も時間をかけて作り出したのだ。

最初のモルモットは自分の飼ってた犬だった。

次に迷い込んできたピーピーやかましい鳥。

自分の進路を遮った猫。

それが徐々にエスカレートしていつて人間になるのには時間が掛からなかった。

卑怯な手段を使って自分に勝った連中や、父や母と言う存在も下等生物とみなしており、たかがそんな“物”などにかける情など存在すらしなかった。

動物型を築き上げるのに5年。そこから自分が超越種になるためにさらに5年。

まあ、引き換えに魔術を使うことはできなくなったが、そんな物などもう必要ない。

自分はそこの有象無象とは違うのだ。今も昔も、そしてこれからも。

「……ん？」

そんな中、階段を使う音が響く。

階段を使わなかった場合、足が付く可能性が高いと言う理由から、彼がいた共同体は飛翔能力を持つ有象無象には階段を使うように命令していた事を思い出した。

「やつときやがったか……」

そして彼らは1人の脱落者も無く、否、1人の“供物”をもってココに戻ってきた。まあ、少しかり礼を言っただけと言う気持ちにもなる。

「ああ、君達ですか……あまりにも遅かったから逃げたのかと思っただよ」

その言葉に対しても下僕たちは何の反応も無い。生意気な態度を取っているのが気に入らない。後でもう1人デザートにして喰ってやろうか。

そんな彼らの中央には1人の青年がいる。

中肉中背、太すぎず細すぎず、顔つきだって美形ともし形とも言えない、よく見るいたって特徴の無い下等生物だった。

そんな青年が突き飛ばされるのを見て彼は小さく晒った。

「……ま、最初から君達には期待してませんでしたよ」

数が多いが所詮下等生物の群れ。餌が粗雑では巨大な魚など釣れはしない。

そう思った彼は下僕たちに向かって侮蔑の視線を向けた後で獲物に足を運ぶ。

「……ごめん」

獲物がいきなり謝る。その行動に彼は侮蔑を隠そうとしない声で言い放った。

「まったくです、本音を言えば美しい女性の方が美味いんですよ。でもまあ、この際仕方が無いから僕の栄養になっていてください」

そして獲物に向かって手を伸ばした時――

「武装錬金」

その声を合図に、獲物の手の中から1本の槍が飛び出て、自分の心臓近くを抉った。

話は少しさかのぼる。

（えーっと……）

ある1人の少年が携帯電話をいじりながら心の中でつぶやいていた。

（『“東”の方へ逃げ切ったホムンクルスの実力は下位ランクだ
が信奉者が何人かいる。されど傲慢・己以外を見下す傾向が強いゆ
えに人望なし』、か……）

“西”からの『報告書』を読み直すと青年は小さくため息を吐く。
“西”から“東”に逃げてきた共同体の残党の情報はすでに少年
にも伝わっていた。もしホムンクルスが信奉者を人質にしたら自分

はすぐに動きを止めてしまっただろう。

だが少年は息を呑む。

（リーダーとかは“西”の方で倒したって言うし、残ったホムンクルスも1体。残り1人になってからが本番だって言ってたけど……）

青年は息を大きく吸い、そして盛大に吐く。

それで少し気を引き締めると、不意に耳に何かが入る。自分は懐にあつた核鉄を強く握り締めて声のした方向を向いて話を盗み聞く。核鉄に備わっている感覚強化。それを青年は躊躇い無く視力強化と聴力強化のために使ったのである。

人数は9人。性別は男性の方が3人ばかり多い。

『でもさ、どっちにしても僕らは遅かれ早かれ死んじゃうんだぜ？ やつらに殺されるか、あいつに殺されるかの違いだよな？』

『大体“西”の奴らにばれたのだって奴が原因じゃないか……』

『もういやよ！！ 私はある方には恩義があるけど、あいつはただ威張ってるだけじゃない！！ アイツに捕まった時、仲間が何人喰われたと思ってるの！？』

そんな会話が聞こえる。即座に自分は報告書に目を通した。

なるほど、この報告書に書かれている『傲慢・己以外を見下す傾向が強いゆえに人望なし』と言う点は嘘でないようだ。少年が報告書とにらめっこしている中、再び声が聞こえた。

『そうだ！！ あの方は最後には俺らを自由にしてくれたんだ、もうあんな奴に従う必要なんてない！！』

『どうせ今以下は無いんだ、徹底的に暴れてやる！！』

『確か奴はあの方が使っていた力を持って無いんだ！！』

『俺だってお前たちに賛成さ！！　だがな、相手はあの方と同じホムンクルスだぜ？　どうやって倒すんだよ？　そこまで言っただけならには自信があるんだろうな！？』

そんな声が響いた時、自然と足を動かした。今の彼らは今置かれている状況に不満を抱いているのは明らかだった。

彼らに恩を売って残った面々を自分たちの派閥に取り込む。誰もがそう考えるだろう。

だが自分はそんな事を考えるより、今苦境に立たされている彼らを助けたかったのだ。彼らは嘘を言っていないように思えたのが自分が動く最大の理由だった。

「あの、すみません」

彼らの前に出て声をかける。彼らは驚いた表情で自分を見据え、先頭にいた……最後に声を上げた男が身構えるのがわかった。

「さっきの話、僕にも詳しく教えてくれませんか？」

自分がそう言った時、先頭にいた男が目つきを鋭くして言い放った。

「何の話だ、小僧」

明らかに自分を疑っている彼の声に対して、自分は彼らの信用を得るために声を上げた。

「貴方たちは、“西”の方から逃げてきた共同体の残党ですよ

？」

その言葉を聞いて先頭にいた男は自分の目を見つめ、そして間を置いて頷く。その頷きを見てから再び口を開いた。

「僕は“西”から依頼を受け、“東”の錬金戦団の戦士として任務を受けた錬金の戦士です」

「……それで、何が言いたい？」

頷いたとは言え、まだ警戒を解いていないのだろう。男は敵意を込めて自分に向かって言うが、それでも逃げるわけには行かない。

「貴方たちは自由になりたいんですね？　でしたら僕に協力してください、幸い僕は核鉄を持っていますから戦えますし、当然成功したら貴方たちの安全は保障します」

その言葉に男は押し黙る。男は他の仲間たちに目を運び、そしてすぐに自分に向き直って言った。

「名前を教えてくれ。全てはそれからだ」

男のその言葉は、自分との契約を結ぶことを決意していた。それを見て自分は大きく頷いてから自分の所属と名前を彼らに教えた。

「僕は“東”側の錬金の戦士、式森和樹です」

和樹は男に向かって名乗り、そして男に向かって作戦を問いたです。

「それで、策の方ですが……」

「待ってくれ。奴なら俺達の方がよく知っているから策の方は俺に任せてくれ」

そう言つて男が近づく。和樹にとって作戦を考える事は苦手だったので男の提案は渡りに船だったので気にする事はなかった。

「でしたら話が早いですね。それは一体……」

その瞬間、和樹の米神に合わせて拳銃が突きつけられる。男は真剣な表情で見据え、周りの仲間も和樹が逃げないように囲んでいた。

「な、なななな何を!？」

拳銃を突きつけられてパニックになる和樹。だが一方で男は目つきを鋭くさせて言い放つ。

「奴は自分が超越者だと思っている。餌に殺されるなんて考えていないからな……悪いが捕まってくれ」

「えええええ!？」

和樹は他の面々に囲まれ、人質よろしく歩かされることになったのだ。

「え？」

思わず呆然とする。自分の急所である章印近くを挟る槍の穂先。自分の命を奪うにはあまりにも程遠く、かと言って確実に罅割れたところは章印にまで達している。

自分の反射神経がこいつら以上だったのが幸いした。もしこいつらと同じだと思ったらゾツとする。

「本当に、ごめん」

「な、何を、言つて……」

呆然と獲物を見据える。何故こいつが自分でも持っていないアレを持っているのだと言つ疑問が浮かび上がった。

（何で？ 何で僕が作れなかったモノをあんな奴が？）

アレは自分が人間を超える存在になる際に研究したが結局手に入らなかったもの。

選ばれたエリートである自分が持つてなくて、何故有象無象のこいつがアレを持っていると言つことが理解できない。

（そ、それに奴は下僕どもが連れてきたんだ。あいつら、何をしていたんだよ……！！）

連れてきたのは確か下僕どもだったはずだ。こいつがアレを持っていることなど、すぐに理解できるはずだ。

なのに何故、のこのこと連れてきたのだろうか。こいつらが連れてきさえしなければ、自分はこの様な目に遭わなくてもすんだというのに。

「てめえら、何考えてやが……！！」

そして彼は見た。下僕たちの表情が自分を見下すようにしているのを。

「なつ、その顔は何なんだよ！？ てめえら、俺を見下す気が！？」

それでも無言。誰も近づこうとしない。それどころか自分から遠ざかっていくではないか。

「てめえら、俺を裏切ったのか！？ ふざけんな！！ 不老不死になりたくねえのかよ！！」

自分を裏切ったクズどもに向かって声を荒げる。しかし章印を半分射抜かれた影響か徐々に身体が崩れてくる。

（あ、ああ……）

自分が死ぬと思った時、彼は怒りと憎悪に支配された。

（何で俺が死ぬんだよ？ 俺はこいつらと違うんだぞ？ 何で俺ですら手に入れてないアレがあんな奴の手の中にあって、下僕どもは俺を見下してるんだよ？ 逆だろ普通！！ 俺がアレを手にし、俺が奴らを見下ろす。何でそっちじゃねえんだよ、理解できねえよ！！）

どうせ死ぬのなら、自分を裏切ったこいつらを1人残らず殺しつくす。

殺しつくしてから自分が持っていないものを持っている生意気な小僧も殺す。

そして己の限界まで殺して殺して殺しつくす。

「殺してやる！！」

口を大きく頬まで裂くほどに開ける。

「殺してやるぞ！！」

爪を鋭く、刃のように伸ばす。

「てめえらクズが！！ 俺を見下す側に！！ 回るんじゃねえよ
おおおお！！」

そしてその咆哮を合図に敵に襲い掛かる。奴らは自分が反撃に出ると思っても見なかったのか呆然としていた。いい気味だ。やはり自分とこいつ等の関係は『こう』でなくてはいけないと再認識する。そして俺を裏切ったことを後悔しながら死んじまえ――

「そうはさせない」

だがそこにあの生意気な獲物が立ちはだかる。そして槍の飾り布が発光し己の視界を覆った。

その色は山吹色。いや、まるで太陽の様な輝きを放つそれは……

「サンライト……イエロー……」

「ゴメン」

その声を合図に再び章印が挟られる。今度は完全に穂先が章印の中央を貫いていた。

「嘘だ……たかが人間なんか……負けるなんて……」

認めない認めない認めないみとめないみとめないみとめないミトメナイミトメナイミトメナイ――

「たかが……タカガコンナ餌ゴトキニイイイイイイイ！――」

その叫びを最後に、自分の意識は闇の中に閉ざされた。

ホムンクルスの消滅を確認した後、彼らは一斉に歓声を上げる。歓声を上げなかったのは和樹と自分に銃を突きつけた男だった。

「すまない。君のおかげで俺たちは解放された、礼を言おう」

だがその人事の様な声に対して和樹は我慢できず、男に向かって掴みかかった。

「じ、銃を突きつけておいて礼を言おうはないでしょう!？」

自分は泣きそうな、それでいて怒っている様な表情をしていたのか男も慌てながら謝罪した。

「ああ、すまない。あと、どうやらそっちの方が君の素らしいな」

だが謝ってすぐに男は口元で笑った。他の面々も微笑ましい表情を自分に向けているのが分かってしまう。

そして彼は衣服を集めているところへ足を運び手を合わせる。おそらく、彼の仲間だったのだろう信奉者たちの遺品なのだろう。

和樹はすぐに真剣な表情になって手を合わせる。

「アーメン、南無阿弥陀仏」

そして彼らは衣服を持って外へ向かう。するとそこへ男は和樹に

向かって声を上げた。

「それであつかましいようだが……」

「はい。わかっています」

和樹は男たちと『身の安全とこれからのこと』について契約している。自分は彼らに協力してもらう（銃を突きつけられたのだが）代わりに彼らの身の安全を保障した。

だがそれは父が皆と相談して決めることなのであり、和樹は携帯電話を手にとって電源をオンにして報告と相談を行う。

「こちら戦士・和樹。任務完遂しました。それとホームクルスの信奉者の件ですが……」

錬金術――

近代より前、全ヨーロッパを風靡した原始的な総合科学技術。目的としては主に3つ。

鉛から金への変換。

かつて神秘がこの世界の全てを支配していた時代ですら、サイフオン・ドラクール・ミハイロフの魔道三大家しか成し遂げられなかった不老不死。

そしてあらゆる奇跡をもたらす完全なる賢者の石の創造。

これらは成功しなかったが種々の技術の発達を促し、近代／現代科学の基礎となった。

だがそれはあくまで表向きのこと。

錬金術は二つだけ。常識では測れない超常の成功を収めた。

人造生命の研究の産物・ホムンクルス。

そして戦術兵器の開発の成果・武装錬金。

双方あまりに危険だったため徹底的に秘匿され、錬金術を識る者達の手で管理される運びとなった。

だが、その手を逃れたモノは今日世界中に散らばり、闇に紛れて人間を喰らい続ける。

そして、それを防ぐのも、錬金術を知る者達。

人々のために錬金術を操る者・人はそれを『錬金の戦士』と呼んだ。

まぶ錬！！

序章編

第0話 錬金の戦士

第0話 錬金の戦士（後書き）

あとがき

久々の小説書きのついでにまたもやりメイクしてしまいました。特に遊戯王小説の参考に回っていた某理想郷で決闘やオリキャラのレベルの高さに息を呑み、某にじではGXでシンクロ召喚の意味も無くやらかす奴らに絶望しました。

この小説は昔の小説をリメイクしたもので、まぶらほや武装錬金、風の聖痕や旧e・go！勢が遊戯王をやるスタンスに再リメイク使用とも考えましたがこの様になりました。

こんなリメイク上等のダメ作者ですがよろしくお願いします。

第1話 日常

ベッドにもぐりこんでスヤスヤと眠りこけていた時、太陽の光が差し込んでくると同時に和樹は目を覚ました。

「んあ……………」

光が眼に入ってきては眠るどころではない。仕方が無く和樹は背筋を伸ばした。彼の身を包んだ山吹色の寝巻きの上は肌蹴っており、しわくちやになっている赤いシャツが映えている。

「あー…………眠い……………」

時計を見ると時間はもう10時近くを回っており、完全に遅刻であることは言うまでも無い。

「…………何だ、まだ10時じゃないか…………」 10時ならまだまだ余裕だ。朝食を食べて青汁を飲んで、朝の運動をしてから学校へ向かって也十分間に合うでは…………

「…………10時？」

そう思っただけで時計を見た瞬間、和樹の表情は青くなる。

「ち、遅刻じゃないか!!」

和樹はとつさに飛び起き、口には歯ブラシを咥え急ごしらえに歯を磨いていた。そんな中、机の上に置いていた携帯のバイブが震えて机から転げ落ちる。

「こんな時間に誰から……」

携帯を拾い、操作する和樹。しばらく操作しているとメール機能が開いた。

「あ、斗貴子さんからだ」

そう言つて彼は現在西の方にいる仲間のことを思い浮かべた。

津村斗貴子、自分と同じ鍊金の戦士。だが彼女は西に位置する鍊金の戦士であり東にいる自分と考え方が違つていた。

西の鍊金戦団はホムンクルスが関わつたのならば即座に信奉者だろうが殺しつくし殲滅するのが主流で、一方で東は信奉者はケースバイケースで交渉し、場合によってはこちら側と契約を施す。

これはホムンクルスの共同体：特に『信奉者』と言うシステムを参考にして『パートナー』と言う協力者の制度を提案、導入していった。

パートナー制度はイギリスに位置する鍊金戦団本部に所属している大戦士長の1人が提案したもので、今までは『ホムンクルスの真似などできるか』もしくは『一般人を巻き込めるか』と言われて一部を除いて見向きもされていなかったが、常に後手に回り続けてしまい遂に西側も少しずつ導入するようになった。

そのおかげで最近では東西共同任務が多くなり、西側の戦士もこちら側の考え方に賛同する者も少なくない。

ちなみに信奉者は明らかに格下だが、パートナーは同列よりやや下である。何故なら偽りの降伏で核鉄を渡された瞬間、本性を表さ

れては眼も当てられないと提案者も考えたのだろっ、キチンとその点を重点的に考えている。

閑話休題。

和樹は手馴れた操作でメールを開いていく。

「えーっと、『任務達成おめでとう、この程度の相手なら心配は要らなさそうだが一応言っておく。相手のホムンクルスがクズ同然だったとはいえ信奉者たちをこっさりパートナーに変えるなど私にはできないことだから素直に感心した。最近君がいる付近で行方不明事件が多発しているのに近いうちに来るかもしれない。君はいつでもどおりちゃんと学校に行くように。津村斗貴子』か……ん？ 続きがあるみたいだ」

続けて操作する和樹。操作が終わった瞬間、彼の表情はこわばり、顔色が青くなった。

『行かなかつたら問答無用で臆物^{ハラワタ}をぶちまけるから覚悟しておくよ
うに!!』

「しょうがない、学校に行くか。斗貴子さんに臆物ぶちまけられ
て死にたくないしね」

顔中に冷や汗を掻きながら彼は何度も頷いた。そして彼は冷蔵庫

から野菜炒めを取り出してから電子レンジに入れて暖める。電子レンジの中に入れた後で炊飯器からご飯を茶碗によそってちゃぶ台の上に置く。そんな中でレンジの音が鳴ると、彼はレンジからそれを食べ始めた。本当ならこんな事をしている暇は無いのだと思うのだが、しばらく経って開き直ったのかもしれないと食べている。

「……」

和樹はもしかやもしかやと食べているが、どうにも気分が乗らない。結局、終始無言で食べ終え、食器を台所の流し場に持っていき水洗いをして制服を引っ張り出して着替え始める。訓練の賜物が無駄な肉は一切無く、身体はかなり引き締まっている。直ぐに着替え終わると、鞆や財布を手にして部屋を離れる。

「じゃ、行つてきます!!」

誰もいない部屋だが笑顔でそう言うと同時に、彼は鍵をかけた後で部屋を離れた。

まぶ錬！！

序章編

第1話 日常

葵学園……代々続く設楽ヶ原学園と清修学園同様、中学高校一貫の魔術師育成学校の名門。故にそこを卒業しただけで一流企業や魔術旅団と言う軍隊からのスカウトが後を絶たない……と言うのは言い過ぎかもしれないが、そう言われるほど魔術や知識のレベルが高

い事で知られている。

尤も、最近の風潮でこの学園をはじめとした名門校である試みが行われているのだがそれは後で述べる。

とは言え、いくら名門校といえどもそこに在学している人間全てが聖人君子で構成されているわけではない。世の常と言うべきか、不良もしくは問題児と呼ばれる生徒もこの葵学園には少数ながら存在している。

尤も葵学園の場合は、この学園に存在する問題児を全て集めたのかと疑問に思われるクラスが存在していたのだが。

その日、葵学園では1時限目の授業が行われており、あらゆるク

ラスで一部の遅刻欠席者を除いて黙々と勉強を行っていた。しかし、1年B組ではある異変が起きようとしていた。

「……？」

ある女子である松田和美は近くの席に座っているクラスメイトの男子仲丸由紀彦の机に眼を向けた。彼も黙々と勉強しているように見えており、一見不自然な様子は見られない。しかしよく見れば教科書とノートを広げてはいるものの、ノートが書かれている気配も無く教科書もまったく関係ないページが開かれているではないか。更に言えば彼は微塵も身動き一つしていない。

「先生、失礼します!!」

和美がそう言うと言しゴムを投げ飛ばす。消しゴムは仲丸の頭を直撃して粉々になる。しかしそれと同時に彼の姿が瞬く間に消えたではないか。

「身代わりのエスケープ!? まさかアイツ!!」

仲丸が授業を身代わりを使ってまでエスケープをした。仲丸がそこまでして授業を放棄する理由など……

「（今日は2年の魔力診断……）まさかアイツ!!」

即座に和美は教室を出て走り出し、階段を駆け下りて“ある場所”へと向かった。

和樹が学校にたどり着き、靴を履き替えるとやはり授業中なのか誰もいない。

「ん？」

だが和樹は保健室の扉にへばりついている男子生徒を見つける。何やらやっているようだが梃子摺っているらしく……

「クソッ！！ 失敗か！！」

などとほざいている。和樹はそれを行っているのが誰だかはつきりと分かった。

（あれは仲丸か……）

だがここで問おう。貴方は彼に関わるか？ 普通の人間ならば、

答えは否としか言わないだろう。

だがこの式森和樹、普通の人間の感覚ではなかった。

「何してんの仲丸？」

「うおっ！！……って誰かと思えば我が親友じゃないか！！」

仲丸は驚いていたが、すぐに和樹だとわかって安堵の息を出した。一方で和樹は仲丸の言う親友を探して周囲を見回していたが、そんな人物など1人もいない。

「ちょうどいい所に来た。お前も手伝え」

「手伝えって言われても……何を手伝えばいいのか、わからないよ」

「……わかった。お前には特別に見せてやるよ」

そう言って仲丸は和樹を保健室の扉の前に連れ出し、指で四角を作ってから和樹に覗き込むように言う。

「何々……」

和樹はそれを覗き込む。とは言え白い煙が邪魔をして中を見る事など出来やしないのだが。

「あれ？ 白い煙が邪魔してるよ？」

和樹は錬金術には詳しいが、魔術関連となると極端に疎くなるのである。仲丸は小さく息をつく和樹に説明を始めた。

「白い煙か……お前にはそう見えるかもしれないが、アレは結界だ。まあ今回は初心者用の結界だがな」

「初心者用って……」

「ありがちだが偽りの光景を見させる効果もあるんだ。俺が中学の時、冴木に見せられた『特定の趣味の方用』よりかはマシだが……あのカードオタクめ、俺にグロ画像見せやがって……だがこんな初心者用の結界なんかこうしてやるぜ!!」

真剣な仲丸を見てなんだか邪魔しちゃ悪そうだな、と思い和樹はこの場を離れようとした。間に合わないとは言え、これ以上遅れるとこっちが怒られる。

「じゃ、仲丸。がんばってね」

「おう……っておい。どこへ行くとする」

「いや。仲丸が真剣だったから邪魔しちゃうまいかなって……」

和樹が真剣にそう言うのと仲丸はため息をつく。

「ああ、後は煙が消えるのを待つだけだからいいさ。式森、いいことを教えてやる」

仲丸は保健室の扉に指を向け、口を三日月上にしてから言い放つ。

「あそこにはな、2年トップの美貌を持つ葵学園三美女の1人・風椿玖里子がいる。もし、彼女のあられも無い姿を手にする事が出来たらどうなる？」

「……風椿玖里子さん？　ねえ、仲丸……」

「そう、あの風椿玖里子だ。彼女の弱みを握った俺は生徒会の実権を握り、葵学園の支配者になる!!　そして……」

演説しそうになる仲丸に対して申し訳なさそうに和樹は言った。

「風椿玖里子さんって……誰？」

その言葉に対して仲丸の声も仕草も凍りついた。そして壊れた玩具のように首を動かしてから和樹に向かって言った。

「今なんて言った？」

「いや、だから風椿玖里子さんって誰って……」

「お前、あの風椿さんを……って、式森はこの春に入学したんだっけな。俺たち中学組と違って……うん、それならしょうがないな。まだ、入学して一ヶ月ぐらいだしな」

なにやら自己完結した仲丸は和樹に向かって説明を開始した。

「彼女は新興財閥である風椿財閥のお嬢様の1人で、生徒会会長と渡り合える智謀と権力、何より財力を持ち合わせている。で、使用回数だって100万以上いってる言わばエリート様だそうだぜ？」

「はあ」

「いいか式森！！ この世界で地位と名声、権力を築き上げてくれるのは学力や成績ではない！！ 金と魔術を使える回数だ！！ 我が学び舎の平均が約8万なのにおまえは何人で、何回だ？ この学び舎はほぼ9割が秋津人で、一般庶民でさえ3桁だぞ！」

「僕も秋津人だけど……7回だよ」

ちなみに追那人と言うのは、世界で唯一獣の遺伝子を持っている被差別民族のことだ。この国は多民族国家であり、1つの民族だけが暮らしている国家ではない。

8割強の黒髪黒目を持つ秋津人。1割を占める金髪碧眼の汐見人。そして半獣人である少数民族の追那人がこの国に住んでいる。秋津

人は残った2つの民族を蔑視しており、今ではそんなに否定的じゃなくなつたがそれでも差別意識はある。

「そう、7回。秋津人とはいえ、7回のお前が学園生活をエンジョイするにはどうすればいいか、よく考えろ」

「友達と一緒に遊んだり騒いだりする。別に上を目指さなくてもいいと思うけど？」

「俺は将来のことを見越して言っているんだ！！現状に満足するなんて定年間際のおっさんでもできるぞ！！リストラだの何だのでどん底に追いやられてもいいのか！？」

仲丸の行動に説得力は無いが説明するまでも無いだろう。だがしかし、彼の言葉を否定するかのように1人の人間が声を上げた。

「……仲丸、俺はその考え古いと思ってるぞ？」

そう言ったのは美形に入る分類の男だった。どうやら彼も遅刻したのか上履きを履きながらこちらへやって来る。

「どういう意味だよ駒野！！」

駒野と呼ばれた生徒は真剣な表情をして仲丸に向かって言う。

「仲丸、今この葵学園に『本気で一流の魔術師になりたい』って考えてる人間がどれだけいるか分かってるのか？」

そう言つと仲丸が言葉を濁らせる。しかし駒野は普段喋れない分声を早口に捲し上げて問いかける。

「今葵学園はいくつかのコースに分けられているが、その中で一

番多いコースは何だ？」

「それは……」

仲丸が言葉を濁すが、和樹が代わりに声を上げる。

「確か決闘者コースだよな？」

「……正解だ。和樹が知ってたなんて意外だな、お前は確か錬金術師コースだったと思ったんだが……」

「岡倉がそのコースなんだよ」

そう、葵学園で試みられるようになったのは決闘者育成コース……俗に言うカードゲームのプレイヤーの育成なのだ。

二十年近く前にアレキサンドライトカンパニーと言うアメリカの会社がバーチャルソリッドビジョンと言う立体映像投影理論を確立させ、それを組み込んだ装置が全国のゲームセンターなどに置かれるようになったのが始まり。

それが十年近く前に小型化が成功して以来、空前絶後のカードゲームブームが世界中で巻き起こったのだ。今やカードゲームは野球やサッカーと同じようにプロリーグまでも作られ、スポーツとして扱われている。

そうになると人の興味はカードゲームに移る。更に言えば様々な科学技術によって人の生活は命を削る魔術を使わずとも豊かになった。

更に空前絶後の決闘者ブームもあって、魔術師が命を削って得られる大金を決闘者は瞬く間に稼ぐ事が出来るようになってしまったのだ。

誰だって自分の命は惜しい。故に、大多数の魔術師の一族が衰退の道を進んでいく事になったのである。

魔術師として残った一族も大部分が決闘者ブームにあやかっただけ、一族の一部を決闘者に仕立て上げるなどといった行動に出るようになったのだ。

「……仲丸、現に岡倉のように決闘者になるためにこの学園に入学した生徒も多いし、俺たちのOBやOGもプロ決闘者として動いている。回数で人間を計る時代は終わったって授業で習っただろ？」

駒野がそう言うが仲丸は納得してそうに無い。現に仲丸は駒野に向かつて声を荒くして叫ぶ。

「それでも今は風樁の弱みを握れるチャンスなんだぞ！？ お前は一生に1度しかないチャンスを無駄にする気か……おっ！！」

仲丸の様子が変わったことに気づく和樹。すると仲丸は勝ち誇った笑みで和樹を見据えた。

「式森、駒野。もう煙は消えちまったみたいだぜ？ それに穴ものぞけるぐらいにまで広がった。じゃ、俺はパラダイスを手に入れて見せるぜ」

そう言って仲丸は穴を介して保健室を覗き込む。

和樹は仲丸を止めようとするが、駒野が無駄だといって教室に行こうかと言い仲丸に背を向けて教室に向かつて歩き出して階段に差し掛かった時――

仲丸の悲鳴が廊下に、否、学園中に響き渡った。

2人がその声に反応して急いで保健室の前まで向かう。保険室の前にまでたどり着いた時、和樹は保健室の前で泡を吹いて横たわる仲丸を見て彼を呼びかける。

「仲丸！！ 何があつたの！？」

仲丸は震える手で穴を指差し、その直後腕が床に落ちる。和樹と駒野は思わず穴を覗き込んでみる。そこにあつたのは……

不細工です代や美心、漫 画太郎のババアに最終兵器UMA子の
着替えシーンを想像してください。簡単に言うならばそう言う事
です。

「うわあああああああ！..!」

和樹は泡を吹いて卒倒した。駒野もうつ伏せになって気絶し、ころうじて耐え切っている中……

「なぐかゝまるゝ！！ 授業エスケープと覗き行為は、B組協定第3条第7項に違反だつて決めたで…しょ…？？」

女子が1人走ってきて和樹は指を穴に向ける。彼女もそれに目が向き……

「ぎゃあああああああ！！」

その悲鳴を聞くと同時に、和樹の意識も暗転した。

結果、和樹と駒野は遅刻及び不可抗力とはいえの覗き、仲丸は覗き未遂の主犯、和美は巻き添えとはいえエスケープ同然の行動が原因で反省文（和樹と駒野はそれぞれが100枚、仲丸は200枚、和美は20枚）を書かされる羽目になった。

『あはははは！！』

昼休み、和樹はようやく反省文書きから解放されて屋上で友人たち朝の顛末を話す。

彼の近くには眼鏡をかけた男子を筆頭にリーゼント頭の男子生徒や体躯の大きい気弱そうな男子生徒、そして中等部の制服を着込んだ女子がいて、結果はリーゼントの友人と中等部の女子生徒に大笑いされると言う結果に終わった。

「笑い事じゃないよ……」

少しふてくされながら和樹は青汁を飲むが気分は晴れない。こんな思いで青汁を飲むのは初めてだった。

「ま、まあ、お前の気持ちもわかるけどよ、通過儀礼ってことにしといてくれよ、な？」

今でも笑っているリーゼントの友人の声に和樹はふてくされると太めな友人がやってきて袋を和樹に渡す。

「まま、これでも飲んで機嫌を直したらどうかかな？」

大柄な青年からある飲み物のパックを渡される和樹。一方で横から和樹を笑っていた友人がやってきて袋からペットボトルを取り出す。

「これもらっぜ、大浜！！」

「いいよ。岡倉君」

大柄な青年——大浜真史の声を合図にリーゼントの青年——岡倉

英之が袋から飲み物を持っていく。残った眼鏡の青年も大浜に近づいて袋の中に手を入れるとウイダーインゼリーを幾つか貰うとソレを口を含む。

「六舛。1つ貰っていい？」

「いいぞ」

和樹も眼鏡の男子——六舛孝二からゼリーを1つ貰い、さらに青汁を口を含む。

「和樹、いつもソレだな」

岡倉が言うと同時に、和樹が小さく笑った。尤も、その笑みは明らかに作り笑いに近いものもあつたのだが。

「結構美味しいよ」

「和樹くんの青汁好きは今に始まった事じゃないし」

「そうだな」

そして中等部の制服を着込んだ女子が和樹の元に近づく。

「お兄ちゃんばかりずるいー、あたしにも1つちょーだい」

「オッケーオッケー。ほら、まひろの分」

和樹がビニール袋からもう1つ青汁を取り出すと、ソレを妹——式森まひろに手渡す。

「青汁だー。お兄ちゃん、ありがとー!!」

そう言ってまひろも青汁を一気に飲み干す。その青汁は苦いとい

うかまずい事で有名なのだが一気飲みとはさすが兄妹。

「じゃ、そろそろ教室に戻るぞ」

六舛が言つと同時に和樹たちが屋上から離れる。

途中で和美達と合流したまひろと別れた後で教室に戻ると授業の用意を行う和樹たち。

しばらく経つと1人の男子が愚痴りながらやってきて乱暴に椅子に座り込んだ。

「くっそ……あのカードオタク、俺に反省文どころか倉庫の掃除やら買出しのパシリまでやらせやがって！！俺が一体何をしたいって言うんだ！！」

反省文書き（明らかにそれだけではない）から解放されたのだから仲丸が戻ってきたようだ。

当の彼は自分を注意したであろう冴木の悪口を言いながら机に足を乗せる。

「あ、仲丸帰って来てたんだ」

「……よお式森。あの時は災難だったな」

普段は他人の不幸を笑う仲丸だが、今回ばかりは共感できる相手がいるので真剣な表情だった。

「まあ、それはそうだけど……」

仲丸の周囲には仲丸とよく話し合う悪友らしき3人・浮氣光洋と御厨真吾に山口隆志、それとは別に同じ被害者である駒野智和がいる。

「……和樹……それに孝二も」

「駒野、仲丸は何を愚痴っているんだ？」

まだ青い顔をしている駒野が彼らに気付くと顔を向ける。六舛が彼に問いただと彼は小さく息をついた。

「……見てのとおりさ。冴木先生が用意した防犯幻影に引っかった者の末路が納得できずに愚痴っているわけだ……気持ちには分かんないが自業自得だろ」

「僕もそう思うよ。松田さんや駒野くん、和樹君には悪いけどね」

あきれ果てた大浜が小さく溜息を吐く。

岡倉も何か言いたげだったが無言で通し、和樹は手にした飲み物を一気に飲み干す。

「式森、それって青汁だよな？」

「ていうか、まだあったの？」

「……アレを見てよく飲めるな……今日は飯を食いたくない……」
「結構美味しいよ」

呆然とする浮氣と呆れている大浜、口元を抑えている駒野を尻目に和樹は頷く。

「浮氣、飲んでみる？」

「遠慮しとく。紅雲寮や男子剣道部に柔道部とかの連中じゃあるまいし、野郎との間接キスなんか死んでも御免だ」

そう言って浮氣は青汁を飲むのを辞退した。すると仲丸が立ち上がって演説を始めた。

「いいか！？ 断じて今回のことは俺に非はない、あれは根暗なカードオタクの冴木が仕組んだ卑劣な罠だ！！ そうでなければ今頃風椿玖里子は俺のものになっていたはず！！」

一方で和樹は横を見ると岡倉たちが顔を青くしているのが見えた。横を見て端正な顔を持つ白髪の男を見た瞬間、和樹も顔を青くさせる。しかし当の仲丸は周りの様子を気にもせずに演説を続けた。

「俺は目標を持って生きているんだ！！ 俺の狙いを妨げた冴木の奴を許す気は無い！！ 更に冴木はあの災以外の全てを否定する邪教集団・神凧一族の一員！！ 奴を自由にさせてはいずれ神凧の使い捨ての駒として洗脳されてしまいかもしれない！！ お前たちもそう思うだ——」

仲丸が勢いよく振り向いた瞬間、和樹の横にいる男を認めたのか仲丸も顔を青くさせた。

「さ、冴木……」

仲丸が男の苗字を言った。

そう、彼こそが和樹たちのクラスの担任（厳密には違うが、既に周囲にはそう認識されている）である冴木春斗その人だったのだ。彼は目つきを鋭くして小さく息を吐くと仲丸に向かって言う。

「仲丸、あんな下らんことがお前の目標か。お前はどうかやら20枚では足りないみたいだな…… 管理人には後で言っておくから放課後に校長室で1000枚、いや2000枚反省文を書け。それと式森、仲丸の代わりに手伝ってもらうぞ」

その言葉に仲丸が顔を青くさせ、和樹は首をかしげた。コレクションの整理とはどういう意味だろうかと思った矢先に駒野が口を開いた。

「冴木先生。ひょっとして……」

「箱で取り寄せてもらったからな。そのカードのプロテクター入りを今回は式森に手伝ってもらう。駒野にも頼もうと思ったが……流石に無理だろ」

口元をまだ押さえている駒野を尻目に和樹は顔を青くさせた。気分が悪いのは自分も同じなのに、ひどいと思った。

1パック5枚で1箱30パック。150枚のカードを入れる作業だというのだ。

「安心しろ。すぐ済むし、4枚以上になったカードはお前にくれてやる」

「いいんですか？」

「デッキに入れる同名のカードは基本3枚までだからな。放課後、職員室の隣にある空き教室まで来い」

そう言つて冴木はこの場を去る。すると仲丸たちは手を合わせる事になった。

「悲惨だな。アイツ『デュエルモンスターズ』って言うカードゲームに嵌ってやがるからよ、アイツの決闘につき合わされるかもな」

デュエルモンスターズとは、アレキサンドライトカンパニーなど世界的な大企業が提携して作られたトレーディングカードゲームの事でありバーチャルソリッドビジョンの普及に伴って世界的なブームを巻き起こしたものだ。

そういえばまひろが可愛いカードがどうのこうので話し合っていた記憶があるのだがそれはともかく。

「ところで仲丸はそのゲームやらないの？」

「俺は子供じみたカード遊びなんかよりもダイスゲームの方が好きなんだよ！！ まあ、レアカードなら金になるから好きだがな！！」

「……噂じゃ冴木先生の腕前はそこら辺のプロ決闘者よりも強いって聞いたぞ……」

冴木の話に脱線してきたところで、浮氣が話を修正する。

「まあ、目標がどうだとかの話に戻すが……俺なら目標は向こうかな」

浮氣の眺めた方角には刀を持った少女がキョロキョロと周囲を見渡し、急いで楓の樹の元へ向かう女子生徒であろう姿があった。彼女はこの学園の制服ではない袴を着ており、その手には日本刀が握られている。

「中等部三年の神城凜。次期葵学園高等部美女候補の筆頭に相応しいからな。“アレ”を除いても彼女にしたい候補に挙がると思うけど？」

「ああ、“アレ”さえないればいいんだがなあ……やっぱり俺が彼女に男の良さを思い出させないとな！！」

「“アレ”関係といえば、やっぱり八神さんも外せないよね」

御厨も何度も頷く。一方で仲丸も顔を綻ばせて頷いた。しかし一方で和樹は目を瞬かせて問いただした。

「八神さん？ 何で彼女が？」

その言葉を言った瞬間、教室中の空気が凍る。すると仲丸が叫んだ。

「その言葉正気かよ！？ いくらなんでもお前、我がクラス……否、我が校一の美少女で成績は筆記は上位をキープして運動神経も抜群の八神輝を知らないなんて情報に疎いってレベルじゃねえぞ！」

「いや。いくらなんでもクラスメートの名前を知らないって事は無いよ、成績云々も又聞きだし。確かに僕も遠目で八神さんを見たことがあるけど……」

確かに葵学園の制服に身を包んだ彼女は空の様に青い髪を腰の辺りまで靡かせており、顔つきだって整っている。

神秘的な雰囲気が多数の人間を魅了するといっても過言ではないし、現に岡倉も始めて彼女を見た時には鼻の下をこれ以上ないって言うほど伸ばしきっていた。

だが和樹は覚えていないが初めて彼女を見た時、何かが致命的に違うような気がして彼女をそう言う風に見る事が出来なかったのである。

「だが確か彼女は冴木先生の身内のようなものだろ？ ある意味危険じゃね？」

「そうなんだよなあ……」

「へえ。彼女って冴木先生の知り合いだったんだ」

「うちの学校にいる連中なら皆知ってるぞ。あの神風一族のご令嬢の1人だそうだ、それも宗家のな」

仲丸の言葉に空返事する和樹だったが、直ぐに首をかしげる。先

程の記憶が確かなら、先程仲丸は炎術がどうたらと言っていた記憶があるのだ。

「あれ？ でも八神さんが炎使ったところなんて僕一回も見たこと無いよ？」

「だから問題なんだろうが……奴らに比べりゃ俺は品行方正だつてえの」

周囲からの白い目を感じてないのかそう言つて仲丸はこの話を打ち切った。一方で駒野も仲丸に賛同するかのように声を上げる。

「実際、冴木先生はあまり危険でも問題でもないし、むしろ味方なんだが……」

意味深な台詞を言う駒野に対して和樹たちは誰もが怪訝そうな顔をする。そんな中、岡倉が声を上げた。

「確かに神城さんは可愛いし八神さんや風椿先輩だつて綺麗だぜ？ でもレベルが高いのつて彼女達だけじゃねえよな？ 例えばホラ、1年F組にいるワインなんとかつて言う海外美人姉妹とかどうよ？」

「あの2人にはもう好きな奴が居るつて話だぜ？ でもまあ――」

忌々しげに呟いた浮氣が気を取り直し、和樹を馬鹿にしきつた顔つきで見ながら鼻を鳴らした。

「噂が本当でも嘘でも、使用回数が7回の誰かさんには関係ないけどな」

その言葉に幾分か空気が冷える。岡倉や駒野も顔つきを険しい物

に変えたが、和樹はそれを気にした様子が見られなかった。

「まあ、ね」

そう言つて和樹は数えるのもバカらしくなる青汁に取り掛かった。何回か飲んでいっているうちに青汁の味が出てきて和樹は満足そうな笑みを浮かべる。

しかし青汁を一気飲みする和樹の姿を自棄飲みだと思い込んだ仲丸がにやつきながら笑う。

「浮氣、それは誰かさんが可哀相だろ？　いくらなんでも7回とはいえ誰かさんにも夢を見せてやってくれよ」

明らかに和樹を地獄に突き落とす言動を言う仲丸に対して、言われた方は青汁のパックを片付けるだけ。そんな中で周囲から声が響く。

「魔力診断、楽しみだよね」

「自分の力を知る機会だしね。それに他人の魔力を知るチャンスでもあるし」

心の底から楽しむ者、他人の弱みを握ろうと企む者。B組には基本的に後者の人間たちが多い。

とは言えやつぱり嫌味に聞こえて気分がいいものではない。

「気にすんなよ、和樹」

岡倉が怒りを噛み締めた声で言う。六舛や大浜も同じ意見なのか真剣な表情で和樹を見る。

「サンキュ、みんな」

そう笑うと和樹は背筋を伸ばした。

「ところでさ、仲丸」

「なんだ？」

仲丸の怪訝そうな様子に対して和樹は天上を見据えて言う。

「父さんが言ってたけど、プロの決闘者でも強い人は僅かな例外を除いてすごいお金持ちが多いらしいよ？」

「何だと！？ くそっ、今からカードを買い漁っても間に合うのか！？ 強いカードは一軒家が建つほど値段がクソ高いのが多いって聞くしな…… 仮にプロになれても割に合うのか！？」

金がかくらむと今までの主義主張を一気に捨てる事が出来る仲丸、現金な奴である。

第1話 日常（後書き）

あとがき

まずは葵学園の風景です。作者の補正が夕菜張りに働いているB組って、マジで罰せられないのが不思議。まあ、猫被ってるし学校側も表ざたにしたくないのは分かりますが……

話は変わって某理想郷でやってる銀魂とオーズのクロス小説を見てふと思った事。

B組の面々って仮面ライダーオーズに出てくるグリードのいいエサじゃないんですか？

第2話 来襲、誘拐、大暴走!?

放課後――

「では式森、ココにカードプロテクターを置いておくからその中にカードを入れてくれ」

冴木によつて空き教室に呼ばれた和樹はカードのパックを開けてカードに移し変える作業をする事になった。

1箱30パック、1パック5枚……計150枚もの大作業だ。尤も冴木が20パック受け持つ形になったのは不幸中の幸いだ、それでもきつい。

現に和樹はカードを入れる作業を戸惑つてしまい、速さがとても遅かつたのである。

「ネコババするなよ。プロテクターも取り寄せてもらったものだから新品50枚セット、ごまかしは通じないぞ。カードは当然だが、プロテクターも手荒に扱うな」

彼はそう言いながらパックを開けてはカードプロテクターに入れる作業を行う。その速さは早くかなり手馴れているようにも思えた。

「早いですね……」

「慣れてるからな。お前だつて直に慣れる」

そう言つと黙々と彼は次のパックに取り掛かる。一方で和樹も次のパックに取り掛かつていた。

数分後、冴木のカードプロテクターが底をつくと次のプロテクターと残り10パックを取り出す作業に入る。

一方の和樹はようやく5パック目だった。

「次、6パック目……ってあれ？」

しかし今度はうまく開けることが出来ない。すると冴木は和樹に向かつてアドバイスを送った。

「パックの上の方に切れ込みがある。そこから縦にすればいいぞ」
「あ、なるほど……」

言われたとおりにするとすんなりと開いた。そしてカードをプロテクターに入れる作業を行う。そして数分後――

「お、終わりました……」

「そうか」

神経を使う作業に疲労困憊の和樹。一方で冴木が近づいてカードを取って調べ上げている。

「あ、カードはいいですから僕はこの辺で……」

「ところで式森」

冴木の声に反応して帰ろうとしていた和樹は彼の方に振り向いた。

「何ですか？ 今日のもう勘弁……」

「本題に入るが、お前は自分の先祖について知ってるか？」

その言葉を聞いて和樹は耳を疑った。とは言え和樹は頭をかきながら彼に向かつて言う。

「一応、ご先祖様の中に有名な魔術師がいるってことぐらいですね……」

「先週、何者かの手によって葵学園に在籍する生徒の情報が流出した。幸い国内で止める事には成功したが、生徒の遺伝子や家系の情報が流された事には変わらない」

先ほどの真剣な表情で自分を見る冴木の雰囲気には和樹は覚えがあった。それは紛れもない“戦士”の放つ闘気そのもの。更に言えば自分など足元にも及ばない雰囲気でもあった。

「流出した重要な情報の中にお前の遺伝子の記述があった。私も調べたが驚いたぞ」

冴木は和樹を見据えて淡々と言った。和樹は「自分のご先祖って誰だろな」ぐらいにしか考えていなかったのだが、それは大きく裏切られてしまう。

「賀茂保憲に安部泰親、分家とは言え神風、岩路、日本だけでもいくつかの血筋がお前には入っている。お前のひいひいばあさん……名前はなんと言ったか？」

「イエジーナ婆さん？ 彼女がどうかしたんですか？」

ちなみに和樹にとって彼女の名は、自分たちの一族が錬金術の裏側に関わるようになった切欠でもあるため印象深かった。

「彼女はトファルドフスキやパラケルススの子孫らしい……ああ、中国の鳳家の血もあったな。特に驚いたのは、彼女はあのクライトンの出身でもあったそうだな」

「く、クライトンですか!？」

和樹はそれを聞き呆然とする。

クライトン家是不老不死を体現した魔道三大家の頂点・ミハイロフの末裔であり、西欧の魔術師一派の中で最大の勢力を誇っていたのだ。

やはり衰退していたのだが2年前に突然当主が変わって以降、新当主が有名なものもあってデュエルモンスターズなどのアミューズメントビジネスなどにも手を出すなどして、企業面としての勢力拡大まで行われている衰え知らずの存在でもある。

「結論を言うが式森。お前は今やあらゆる勢力に狙われているといつてもいい。特に神風には注意しておけ、奴らは一部を除いて『炎の精霊王の祝福を得た』と言って馬鹿げた行動を取るからな、薬物で洗脳……なんてされたらそれこそ最悪だ」

恐らく彼は自分にその事を言うために態々カードの整理と言う仕事を与えたのかもしれない。恐らく『遅刻の罰』と言うのは単なる理由でしかないのかもしれない。彼と自分の接点など『担任と生徒』以外、何もないのだから。

「わ、わかりました。肝に銘じておきます」

そう言つて和樹は今度こそこの場を後にした。だがそこに冴木の声が響く。

「ああそつだ。これからもこういう事があるかもしれないから、その時はよろしく頼む。もしデュエルモンスターズをやっていたら今度決闘デュエルをやらないか？ いつでも待ってるぞ」

和樹が怪訝そうに振り向いた時、冷徹で無愛想な担任だと思つていた教師が小さく微笑んでいた。珍しいものを見たと思つた和樹は

曖昧に返事をするこゝしか出来なかった。

まぶ錬！！

序章編

第2話 来襲、誘拐、大暴走！？

「……少し驚かせた、かな？」

そう言っただけ、牙木春斗はカードを整理する。

彼が箱で買ったのはドラゴン族・恐竜族・海竜族専門のサポートパック『竜王の眷属』と言うシリーズの最新段だった。

彼は先の3種族を中心に組んでいる（尤も、殆どが『ドラゴン族として扱う』類の効果を持つモンスターばかりだが）のでこのようなカードパックを好んで買っている。

カードを調べてから腰のホルダーから白と黒、そして灰色のデッキケースを取り出す。机の上にデッキケースを並べ、新たなデッキを組む春斗。

出来上がったデッキは白いデッキケース、規定枚数がオーバーしたカードは灰色のケース、残ったカードは黒のケースに仕舞いこんだ。

「……このカードを使うとなると、今まで使っていたカードは重くなる……いや、もし俺が敵だったらこのコンボをどうやって防ぐか……となると攻撃力は低くなるが今は組み込んでいないアレでも十分価値がある……」

彼本来の一人称に戻ったことにも気づかずに目を瞑ってデッキの

試運転を試みる春斗。

この時間は教師や剣士である前に“カード使い”と呼ばれる戦法を取る戦士、何よりも生まれついでナチュラルボーン・デュエリストの決闘者である彼にとって食事も性行為以上に変えがたい神聖な時間だ。

名曲に身をゆだねている様に眼を瞑った表情は教鞭をとっている冷徹な人間の時とは別人そのもの。

だがそこに春斗の携帯が鳴り響く。その途端春斗の表情は空想の決闘……もしくはデツキ構想から現実世界に引き戻されて不機嫌な表情に、そして着信の名前を見て更に機嫌を損ねた表情となる。

「……はい、こちら冴木です」

『ようやく繋がったか。貴様に聞きたい事がある』

その声は春斗がとてつもなく忌み嫌っている人間の中でも上位に入っている者の、それも自分が属している頼道派と対立する長老派の重鎮の声。それを聞いた瞬間、春斗は不機嫌さをそのままに舌打ちをした。

ここで神風一族について詳しく話しておこう。

確かに神風一族は退魔師、そして炎術師としては優秀な部類であり世界最高峰の一族だと言われている。

源平に南北朝や戦国そして江戸時代などでは日本を陰で護る組織として神城や杜崎以上の派閥を持っていた。

特に破邪の力を秘めていた『黄金』の炎が神風最強神話を物語っていた。何しろ術者がその気になれば病や呪いだけを浄化する事が出来るので、その力を欲していた人間にとっては羨望と嫉妬の感情を持たせていた。

しかしそれは血筋による力でもあり、血が薄れていくにつれて能力が低下することも必然である。

その日本最強の炎術師集団も例外ではなく、分家は炎の最高位であつた『黄金』を失つて久しい。

それでも炎術至上主義が神風を支配し、強盗殺人や強姦に脱税などが横行して徐々に腐敗していった。

だが近年になつて人間の呪詛の強化による退魔成功率の減少や魔術の理論が一般にも浸透した事、更に魔術師を衰退に陥らせた決闘者ブームによつて、命を惜しんだ退魔師が挙つて方向性を転向するなどの事態に陥つたのである。

妖魔邪霊との戦いではなく娯楽によつて退魔師としての家系を絶たれた家の始祖は草葉の陰で盛大に泣いている事だろう。

神風もその例に漏れなかったが、（幸か不幸か）先代宗主であつた神風頼道のおかげで衰退から逃れる事が出来た。

彼は炎術師としての腕前は神風の中では三流だったが、その分策略に長けていた。彼は謀略を使ってライバルを蹴落として宗主となり、様々な魔術師一族や財政界に分家を婿入り嫁入りさせるなどをして周囲とのコネを作り上げた。

彼が宗主を引退した折に企業を興した数年後、デュエルモンスターズが流行つた際に決闘業界に進出した。

当然彼らのお題目である『炎の精霊王の祝福を得た選ばれし一族』なんて言い分はこの世界では微塵も通用しない。皮肉な事に炎術至上主義に固まっていた術者の内何人かは『炎術は万能ではない』と悟つて更生してしまつていた。

更に言えば、稼ぎ頭となつた決闘者のうち大部分が炎術を使えない『無能者』だつたのだ。

頼道にとってそれは寝耳に水でもあった。彼にしてみたら決闘業界に進出したのは、彼自身の小遣い稼ぎと『無能者』の治療費なんかこれ以上出せるかと言わんばかりの姥捨て山程度の感覚しかなかったのだが、まさかそれが大当たりになるとは思っても見なかった。おかげで風牙衆との関係もある程度改善されたため、正史の風牙衆がその事を聞けば盛大に叫び声を上げて突っ込み、別の意味で胃腸を悪化させていただろう。

それで神風の腐敗が止まったのかと言えばそうとも言えず財政界とのコネや決闘の中継による膨大な収入源と引き換えに、やはり退魔師としての神風一族は史上最低にまで陥ってしまっていた。中には決闘者になってもなお炎術至上主義の考えに固執する者も出る始末。

尤も正史とは違い頼道を責める事は難しい。退魔師及び魔術師としての一族は滅んだがセレブとして財政界に華々しくデビューした一族も多く、もし神風が決闘業界に進出しなかったら彼らと立場が逆転していた可能性だってあるのだ。

ちなみに頼道及び彼に賛同した者達と炎術至上主義に凝り固まった者達の間の関係は当然の事ながら悪化し、春斗もデュエルモンスターズをやっているため頼道派に組み込まれていた。今も頼道派に属しているものは神風本拠とは別の場所に本拠地を構えている始末である。

閑話休題

「これはこれは大神雅行殿。長老派の筆頭であられる貴方が先代や宗主を介さずに出るとは何事ですか？ 実質敵対している私に電話など、余程緊急を要するものでしょうね。ですがいきなり貴様呼

ばわりは無いと思います、切られないで話し合うのも感謝して欲しいですね？」

春斗の忠告を無視して雅行は更に声を上げる。

『式森和樹と言う人間を知っているか？』

人の忠告を聞かずに己の用件のみを言う雅行に舌打ちする。
こっちは既に和樹と会話を行った身だ。あまりのタイミングのよさに苛立ちを隠そうとはしなかった。

「自分が受け持っている生徒ですから知らなかったらそれこそ問題です。ああ、妹の方を攫って男どもにマワさせる……なんてオチは止めてくださいよ？　ただでさえ敵が多いんですから、これ以上増やさないでもらいたいですね」

『何をふざけたことを言っている？』

雅行の言葉に対して春斗は怒りを隠し通す事が出来なくなり、前髪を左手で掻き揚げてから声を受話器に向かって声を荒げる。

「……ふざけてんのはそっちだろ……2年近く前にテメエの次男坊が、その笑えねえ大ボケを秋月の女にかましやがっただろうが。そのおかげで奴らが反神風同盟に加わって無視出来なくなっちまった、切欠があれば明日には戦争になってもおかしくねえんだぞ？」

口調が完全に素に戻った春斗の言葉には『今の状況がおかしい』と暗に言っている。だが電話の向こうの人間は悪びれた様子すら見せない。

『もう一度言おう。何をふざけたことを言っている？　我ら神風

は炎の精霊王の祝福を得た選ばれし一族、秋月のような妖魔との混じり物と対等に扱われるのは心外というものだ』

雅行の言葉に春斗は辟易する。既に聞く気もなく、カードをデッキケースの中に仕舞う作業の最中だ。

『話を元に戻すぞ。今すぐ式森和樹を神凧宗家につれて来い。担任である貴様なら神凧に誘いこむのは簡単だろう？』

またこれだ。典型的かつ時代遅れな思考を持つ神凧の人間である雅行の言動に怒りを覚え、かつ嫌味を込めて挑発代わりに言い放った。

「で、式森和樹の相手は誰だよ？ テメエの娘か？ 他の分家か？ 綾乃さまは『宗主』が許さないでしょう？ それに先ほど式森に『神凧には気をつける』と警告したばかりでしてね、残念無念これは完全に先手を取られましたな雅行殿？」

『何のためにあの“無能者”を手元に残していると思っているのだ！！』

無能者。

その言葉を聞いた瞬間、春斗の余裕たつぷりな表情が一変する。それでも電話の向こうにいる雅行の言葉は止まらない。

『こう言う時でないと役に立たぬ無能に役目を与えてやる、それすらも分からぬか！？ それにあの女が相手なら余程の変わり者で無い限り直ぐに誘惑されるだろう！？ それにその小僧も要は“あれ”を孕ませれば問題ないわ！！ 貴様も武哉も操も他の連中共々カード遊びに夢中になってないで少しは我らのために——』

それを最後に春斗は携帯の電源を切り、その顔には憎悪の表情が張り付いており息も荒い。表情は正に悪鬼羅刹そのもの。今の彼を見れば殆どの人間は腰を抜かすであろう。

だが春斗が息を荒くしている中、2人の女子が言い争いながら姿を現した。

「だから最初に私が言うと言ってるだろ!!」

「神城なんか任せられないのよ。言い漏らしや言い間違いがあったら……」

1人は和服を纏い日本刀を持った小柄な少女で、もう1人は長身で春斗と同じか僅かに低い葵学園の制服を着た女性。神城凜と杜崎沙弓、それが二人の名前だった。二人は自分を前にしても言い争いを止めなかったが今回は付き合う余裕など無いし、煩わしかった。

「神城に杜崎か……今の俺は機嫌が最悪と言っても足りないくらいだ。ガキの喧嘩を続けるならペットどもの晩飯になると思え」

その隠そうとしない殺意と雰囲気、そして鬼のような表情に圧されたのか2人は争いを止め、沙弓から言葉を発した。

「実は実家から連絡がありました。『式森和樹の遺伝子を手に入れる』と。しかし私は1つだけ聞きたいことがあります」

「……私も同じです。『杜崎、神凧、風椿に遅れるな』としか……杜崎と風椿に関しては既に分かっているので聞くまでもないんですが……」

2人の答えに対しても無言。すると凜が春斗に詰め寄った。

「冴木先生、いえ春斗殿!! お聞きしますが神凧が用意した刺

客というのは……」

「そうだ」

その様子に2人はショックでよろめいて身体を震わせ、春斗は二人を無視して横を通りその場を後にした。一刻も早くあのような馬鹿げた命令を取り消させなければならぬからだ。

自分を見た人間が思わず動きを止めるが、それすらも鬱陶しい。そんな事しか考えていなかったのだから、春斗は彼らしくもないミスを犯した。

「……式森」

「和樹……！！」

そう。急いでいたあまり、2人に『自分が何とかするから何も行動するな』と言うのを忘れてしまったのは彼のミスと言えよう。既に彼女達の表情は殺意に満ち溢れていたのだから。

同じ頃、生徒会室の中にて。

金髪のスタイルのいい美女……仲丸の標的になった風椿玖里子が遠くからでも高級品だとわかるコーヒ―を堪能していた。

「うーん……流石は最高級品の『ブルーアイズマウンテン』……値段の価値はあるわね……」

飲み終わった時、ノックが響く。

「玖里子様、お電話です」

そうやって1人のメイドが黒い電話を持ち込んできた。だがそれは携帯ではない。

「電話？ それも昔なつかしの黒電話。珍しいわね」

「はい。その方が確実だと言う事で」

その様な手段を使ったという事は、何か理由があるのだろう。それも、すべてを差し置くほど重要な。玖里子はそう考えてメイドに向かって声を上げる。

「何かあったのかしら？」

「いえ、ですが緊急の連絡だそうで」

メイドの言葉に対して興味深げに玖里子が電話を手取る。しばらくブルーアイズマウンテンを堪能しながら相手との会話を続けて

いたが……

「何ですって？ 杜崎や神城、それに神風が！？」

聞きなれた3家の名を聞くと呆然とした声を上げる。彼女は神風も知っていた。

退魔師で在りながら、その発言力は並みの財閥を遥かに凌ぐ勢力であり、退魔師の実力も神城と杜崎両家をも凌ぐほど優秀。

財閥としての最大のライバルである『床島』同様、成り上がりの自分たちにとって目の上のたんこぶでもあった。

「それで、床島と天神、音羽、秋月、九重、綾小路は？ あ、確か床島は霧がSPの1人に熱を上げているって噂よね……それに綾小路家も衰退の動きはあまり見られないし……」

先にあげた六家は確か年頃の少女が何人かいたはずだった。

床島と綾小路以外の四家は退魔師だが神城や杜崎以上に危険にさらされているのに、行動を起こしていないところを見ると動く気が無いのかもしれない。

綾小路家はかつて海外である事件を解決した男の血を取り込んだため、今は動く必要性がない。

『はい。ですから床島家及び綾小路家は問題ありません。残った四家は情報自体を入手していないか、もしくは知っていても興味がないかのどちらかです。それとクライトンを筆頭とした海外の名門から動きは見られません』

「そう。じゃあ動いたのは少なくとも神城と杜崎、そして神風ね……まあ、あの子達が動く事はまずないでしょうけど」

最後の方は小声だったが彼女は学校の1年生の生徒が載っている

名簿を見る。

そして開かれたページには1人の男子生徒の写真とそのプロフィールが乗っていた。

「式森和樹、か……」

彼女はそう言うと、写真に指を這わせていた。

和樹はカードを買いにコンビニへ向かう岡倉たちと途中で分かれて寮へたどり着くと迷わず自分の部屋へ向かう。

「遺伝子、かあ……」

そう言うと和樹は溜息をつく。和樹は冴木の忠告どおり警戒しな

がら寮に帰宅している最中なのだ。

ほとぼりが冷めるまで寄り道なんてしている暇ではない。2階に駆け上がり、自分の部屋の入り口までたどり着くと安堵の息を吐くとドアに手をかけて開ける。

だがそこで彼は信じられないものを見てしまった。

「え……？」

そこにいたのはピンクのツインテールを靡かせた少女。彼女は今、自分の部屋で着替えを行なっているのか下着姿だった。

「き……」

「あの、その……」

和樹が顔中に冷汗を掻くと、目の前にいる少女は叫び声を上げた。

「きゃあああああー!!」

「し、失礼しました……!!」

そう叫ぶと同時に和樹は扉を閉める。そして心臓を押さえながら息を何度も何度も吐き続けた。

「え、えーつとありのまま今起こった事は『男子寮に戻って僕の部屋の扉を開けたら、そこは女子が着替えをしている部屋だった』って奴だよ……」

自分でも何を言っているのかさっぱりわからない。催眠術だとか致命的な勘違いだとかじゃ断じてない。もっと恐ろしいものの片鱗を味わった気分だった。

もしこの場に斗貴子たちがいたら最悪の場合、自分は最近流行の

『nice boat』と言う状況になるだろう。恐る恐る扉を見てみても、そこは自分の部屋の扉だった。

「僕の部屋だよね……？」

意を決してノックをする。もし夢幻ならそれでよし、返事が返ってきたら……

「はい。いいですよ」

どうやら現実のようですクソツタレ。

先ほど冴木の言葉を思い出し、警戒心丸出しの様子で部屋に入る。和樹の姿を見た瞬間驚いた様子だったがすぐに三つ指で深々と頭を下げていた。

「お帰りなさい、和樹さん」

「あ、うん、ただいま……」

反射的に思わず和樹も普通に返事を返してしまったが、相手は和樹の知らない顔である。

今までの依頼者や助けた信奉者の中に彼女がいた記憶はない。誰だろうと思う、聞こうとするがその前に女の子の口が開く。

「ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ そ、それとも……」

そう言っただけで彼女は恥ずかしそうに頬を染める。一方の和樹はついていけない様子だった。

「そ、そんな事より君は誰？ どうしてココにいるの？」

「まだ、名乗っていませんでしたね。わたし葵学園に転校してき

ました宮間夕菜といいます。これからよろしくお願いしますね。和樹さん」

「コチラこそって……僕は君の事知らないけど君は知ってるの？」

「はい。忘れた事は1回もありません」

どうやら夕菜は和樹のことを知っているようだが、和樹はまったくもって見覚えがない。戦士としてそれなりの記憶力（学生としての記憶力はからつきし）は持っているものの、やっぱり夕菜の事は覚えていない。

「じゃ、なんでこの部屋にいるの？ 彩雲寮は男子寮だから女子は入れないはずだけど？」

ココは男子寮であり女子寮ではないし、女子を連れてくる男子もここにはいないはずだ。

「ですが夫婦が一緒に住むのは当然です。学校だって許してくれます!!」

「……は？」

一瞬何を言っているのか解らなかった。恐らく眼が点になっているだろう。

さすがに和樹も先ほどの発言には耳を疑った。そして数秒後、和樹は叫び声を上げる。

「なんだってええええええ！！！」

和樹が叫ぶと同時に夕菜はにこやかに微笑む。

「はい。妻です。不束者ですがよろしくお願い……」

「ちよつと入るわよー」

女性の声がドアの向こうから聞こえ、夕菜が慌てて立ち上がってドアのところに向かうがそれよりも早くドアは開き、2年の徽章をつけた女性が入ってきて夕菜の前に立った。

「駄目です、帰ってください。和樹さんは誰にも会いません」

「な、何を言って――」

和樹は話に追いつけていない。しかし一方で2人の会話は和樹を置いて進んでいく。

「いいじゃない。ほんの少しぐらい。運がよければ1回だけで済むんだし」

「駄目って言ったら駄目です!!」

和樹を置いてけぼりにしてヒートアップする二人、と言うより夕菜。

「えーっと……誰ですか？」

「私は2年の風椿玖里子、あなたは式森和樹。これでお互いの名前を知ってるわけだから問題ないわね。じゃあ、しましょ」

そう言いながら胸元を開けた女性・玖里子は和樹を押し倒そうとするが、和樹は即座に飛びのく。

その際彼女の胸ポケットから本（『正しい色仕掛けの方法（男子高校生誘惑編）』と大きく書かれていた）が落ちたような気がしたが気にするところではない。

「いきなり何するんですか!!」

「避けないでよ。いい気持ちにさせてあげるから」

「玖里子さん!!」

再度、和樹に飛び掛ろうとするが玖里子の前に夕菜が立ち塞がった。

「あら夕菜ちゃん。邪魔しないでくれる?」

「そうはいきません!! 和樹さんは妻である私が護ります!!」
「勘弁してよ……」

和樹は泣きそうな声で呻くが、やはり夕菜は聞いていない。

「でも、今の内に……」

そう言うと同時に和樹は2人に気付かれないように扉の方まで移動する。幸い2人は言い争いどころか戦闘の音まで聞こえる状態になっていて自分の事を見ていない。

戦士としての足裁きで足音を立てずに窓まで移動して鍵を開けた時、大声が響く。

「あ!! 和樹さんどこへ行くんですか!!」

どうやら気づかれたが気にせず窓から飛び降りてこの場を後にする。

彩雲寮から出たところで、和樹は複数の黒服を纏った男たちに囲まれたのだった。

「式森和樹だな?」

「ええ……あなたたちは?」

その言葉と同時にいつの間にか背後に回っていた男が自分の鼻と口にハンカチを当てる。なにやら薬品の臭いがしたのが気になり和樹は目をしばたかせる。

「い、いつたい、なにを……」

「よし運び出せ。お前らは追ってきた奴を倒せ、いいな？」

その言葉を最後に和樹の意識は途絶えたのだった。

和樹の目が覚めた時、既に景色は真っ暗闇だった。見た感じ窓には鉄格子が詰められているから出られそうにないし、薄暗いから扉がどこにあるのかすら分からない。

「ココは一体どこなんだ……？」

流石の和樹も周囲を見回すしか出来ない。かろうじて分かるのは自分が攫われたと言うことぐらいだ。そんな中、ある言葉を思い出してしまふ。

（お前は今やあらゆる勢力に狙われているといってもいい。特に神風には注意しておけ、奴らは一部を除いて『炎の精霊王の祝福を得た』と言って馬鹿げた行動を取るからな）

ふと冴木の言葉を思い出す和樹。まさか自分は遺伝子を欲する勢力に攫われたのだろつかと思えてくる。

となると容疑者候補筆頭は冴木が言っていた『神風』と言う一族だろつ。

「でも僕は慌てない！！ 何を隠そう、僕は誘拐（される方）の達人だ！！ …… って言っても意味ないよね ……」

自分で勇ましく言っただけにへこむ和樹。そして今はこの場にいる者達の事を考える。

「岡倉たち、今頃必死になって探しているのかな …… 携帯もバッグも今は無いし、どうやって連絡を取るう ……」

その時、何かが外される音が響いて扉が開かれる。そして外から1人の少女が入ってきた。

月明かりからかろうじて分かる外見は青味が強い長い黒髪に端正な顔つき、そして男の本能を擽る豊満な肉体に獣欲をそそる首輪型のチョーカー。

「え！？ や、八神さん！？」

彼女には見覚えがあった。彼女・八神輝は自分たちのクラスメート（噂では担任である春斗が頼み込んだらしい）であり、葵学園一の美少女として有名だったからだ。

そして今、和樹は彼女の姿を間近で見て息を呑む。だが、和樹は彼女の決定的な変化に呆然となっていた。

彼女の米神部分から猫のような耳が生え、更には腰の辺りから尻尾が生えている。学校で見た時は普通の人間だったはずだが、今の彼女は獣耳に尻尾を生やすという状態になっている。

「え？ え？ ええ！？」

今まで見てきた彼女に対する強烈な違和感を感じる前に信じられないことが起こる。

なんと彼女はいきなり服を脱ぎだしたのだ。服の擦れ合う音と脱がされた服が地面に落ちる音だけが響き、しかし彼女はそんな自分の様子に気にした様子もなく脱ぎ捨てていつて遂には下着姿となる。しかもレースが使われた黒い下着は明らかに扇情的で、男の欲をそそののに十分すぎる威力を持つ。現に和樹も思わず凝視してしまうほどだった。

一方で輝は膝を折って両手を地に付け猫が飼い主の下へ向かうかのような仕草で和樹の元へ向かう。そして視界が彼女の顔と胸の谷間で覆われた時、ついに彼女が口を開く。

「式森君？」

「は、はい！？」

明らかに自分がいることに気づいており、それでいてあっさり服を脱いで下着姿になる輝。その状態でなお顔を赤面する様子すらない。

とは言え、和樹は顔をタコのように赤くしており、彼女に向かってあることを問いただした。

「や、八神さん！？ ひょっとしてあなたも……」

「その様子だと、何で自分がココに連れてこられたのか知ってるみたいね」

八神輝の登場によってココが神風であると発覚し、目的も判明した。後は彼女を説得するしかこの状況を逃れる術はない。故に和樹は今まで以上に頭の回転を早めて声を紡ぎだしていった。

「ま、待って八神さん！？ この状況、おかしいって思わないの！？」

「そこは私たちが考えることじゃないわ」

最初の説得は失敗に終わる。だが和樹は諦めずに続けざまに叫んだ。このままだと彼女に襲い掛かってしまう自信があるのでさっさと説得するしかない。

「あなたはそれでいいんですか！？ 神風一族の道具にされてるんじゃないんですか！？ 大体あなたが何故こんなことを！？」

「それで？」

輝は和樹の反論に興味なさそうに言い放つ。一方の和樹は彼女の表情に呆然となった。

彼女は自分の状況を受け入れてしまっているのだ。その表情は夕菜が浮かべていた真剣なものでも、玖里子が浮かべていた冗談めいたものでもない。

「え？」

「……まあいいわ。あなたにとって私の印象は何かしら？」

その言葉に目をしばたかせる和樹。和樹はクラスメイトから聞いた噂を次々と思い出していく。

「頭もよくて運動神経抜群……歌も上手だし……葵学園で最も優秀な生徒だって先生が言ってたのを覚えてるよ……」

「そうね。でも神風一族にとって炎を使えない私は無能者以外の何者でもないわ」

あつさりと自分が道具であると、不要なものだと言うことを肯定する輝。

一方で和樹は輝の台詞を反芻する。今彼女は信じられない言葉を口にしなかったか？

「え……今なんて……」

「無能者って言ったのよ。炎を使えない賢者より炎を使える愚者に存在価値があるのが神風一族。つまり私は神風分家の最下位以下の存在なのよ」

その言葉に愕然となる和樹。

彼女の成績は筆記は上位をキープして運動神経も抜群で、チートの塊だとかスーパーコーディネーターだとか異常だとか言われている輝。

その彼女が炎を使えないというだけで自分を卑下し、自嘲している。

「本来なら学校にも行けずにココで朽ち果てるか、分家や長老の方々の慰み者になるしか無かったけど私が追那人だから生かされたのよ」

淡々と言う輝だが和樹は反論するしかない。でもその言葉が思い浮かばない。

「どうして……」

「追那人には秋津人に無い力を持っていて神風はその力を欲していた。私はただそれだけのために生かされ続けてきた」

そう言つて和樹に迫る輝。和樹はと言えばもう何がなんだか訳が分からない状態だった。

「私もあなたも神風繁栄のための道具でしかない。それにあなたにとつてもいい話だと思うわ、何も考えずに私を抱いて犯し続ければいいだけだから——」

輝の行動と言動、扇情的な下着と鎖が繋がった首輪だけと言う姿を前にして和樹の理性など限界に近い。

何も考えずに彼女を抱け、そして喰らえ——

そんな言葉が聞こえ、己の獣欲に負けそうになった瞬間——

「そこまでよー!!」
「輝姉さまに手を出すなあー!!」

それは一瞬の刹那。突如現れた拳での一撃で自分と輝の距離が離され、刃の一閃が和樹を襲った。
そこにいたのは日本刀を構えた一人の少女と構えを取る長身の女性。昼休みに話題になった少女・神城凜とクラスメイトの杜崎沙弓であった。

「うわっ！？ な、何が……」

和樹の呆然とした言葉遣いに対して刀を構えた少女・神城凜は刃の切先と己を見据える目を鋭くさせる。いつの間に自分の背後を取った女性・杜崎沙弓もまた自分の首筋に込める力を強くした。

「貴様が式森和樹か。事後承諾で悪いが一族の存亡など比べ物にならない緊急事態のため、お前の素性を勝手に調べさせてもらった」

そう言ったのは凜だったが、刀を収める気は無い様だ。一方の沙弓も手足にプロテクターを身につけた状態でいつでも首をへし折る準備が出来ている。

「調べて見て悲しくなった。運動は得意だが学業の成績は中の下かそれ以下で取り柄もない。さらにあのB組に所属し、そのうえ覗きまでとは……」

「私は言うまでも無く知ってるわね式森くん？」

ちなみにココの和樹くん、数多のまぶらはSSと違って偽装工作なんか一切行なってません。まさかそれが気に入らなくて自分を殺そうとしているのだろうかと思いきや、直ぐに二人は殺意を収める。

「まあ、そんな事などどうでもいい話だ」

「え？」

あっけに取られる自分に対して二人は呆れたように言い放つ。特に凜はあきれ返ったかのように眼を閉じて言葉を紡いだ。

「成績で人の人格の善し悪しを計れたら誰だって苦労しないだろ

？ 善良な優等生が裏であくどい事をやっている、など吐いて捨てるほどあるからな。今日の覗きだつて主犯はともかく残った面子は運が悪かっただけだという見方が強いぞ」

「大体B組の成績は優等生クラスのF組の殆どより遥かに高いから、成績で人の善し悪しを決めるのは危険であることを皮肉にも彼ら自身で証明しているわ」

どうやら2人は自分をそれが理由で殺そうとはしていないようだ。だが安堵のため息を吐いた瞬間、2人の殺意が再び膨れ上がる。

「軟弱者にしか見えないお前を夫にするつもりなど私には無い。とは言え、たかがそれぐらいで殺すつもりなど最初から無い」

「だけど1つだけ聞かせてもらっわ。さっき何やろうとしてたの？」

その瞬間、和樹の身体に再び冷や汗が流れ、思わず下着姿の輝の方を見る。

それを見た2人は殺意を爆発させる。まさか2人は自分が輝を手籠めにしたと思っているのだろうか。

ついでに言えば先の衝撃の影響か悪魔のいたずらか、輝の胸部分を隠す下着のホックが右側部分が二の腕にずれているではないか。

「……神城、私は輝を連れて逃げるから手柄はあんたに譲るわ」

「……本命をお前に譲る時点で不満だが了解した……」と言っわけだ、式森」

2人の異様なまでの静かな声と今にも爆発しそうな雰囲気と錬金の戦士としての本能が叫び声をあげる。

その叫び声——『ニゲロ』と言う言葉にしたがって転がったのを合図に——

「お前とまひろさん達には悪いが、ココで死んでもらうぞ」

彼女の刃が先ほどまでいた所を襲った。既に沙弓は輝に上着を着せて逃亡を開始している。

「うわっ！！　ちょ、ちょっと待ってよ！！」

「待たん！！　貴様、輝姉さまに何をした！？」

武器も無く逃げ回る和樹に斬りかかる凜。和樹は必死になって弁明を行おうとしたが反論材料が微塵も無い。

何しろ輝の姿に息を呑んだのも獣欲をそられたのも事実。恐らくその件は彼女も知っており、反論を言おうとしても彼女の逆鱗を逆撫でするだけだ。

「何も言えないか。貴様は輝姉さまが神凧の奴隷同然の身分なのをいい事に抱いて犯したりしたのか？」

刀の切っ先が自分に向けられる。既に背後は壁、逃げることなど出来やしない。

そして凜は凍てついた声で和樹に向かって吐き捨てる。更に今の彼女の眼は斗貴子がホムンクルスを殺す時と同じ輝きを必要としない眼だった。

「もしそうならば、私はお前を絶対に許しはしない」

その言葉に対して和樹は声を限界まで張り上げて叫ぶ。

「していないしてない！！ 間一髪のところでは君たちが来たんだ！
僕だって助かったと思ってるんだよ！！」

沈黙は自分を不利にするだけだと和樹は判断して必死になって横に振り続ける。

武装錬金が手元に無い今、生きるためなら『3回回ってワンと鳴け』でも何でもやるつもりだった。

必死そうな表情が伝わったのか、凜も眼を元の輝きを取り戻し、自分を見据えた。

「……ふむ、この様子じゃ本当に手を出してなさそうだな。まあ、今回は信用しよう」

刀を鞘に収める凜を見て安堵の息を吐く和樹。だが彼女は目つきを鋭くして言い放つのみ。

「だが輝姉さまに妙な事をしてみる。その時こそ貴様の最後だと思え」

「さ、Sir Yes Sir……」

凜の有無言わさない迫力に思わず直立不動の体勢で敬礼する和樹。するとそこへ沙弓と輝が戻ってきたのを見て彼女が声を荒げる。

「神城。殺してなかったのかしら？」

「未遂だったみたいだしな。それより杜崎、輝姉さまと戻ってくるなんてどういうことだ？」

凜の言葉に対して沙弓も溜息を吐くしかない。

「妙な事になったわ。風椿先輩達がココに来てるみたい……」

その言葉を聞き凜は舌打ちする。だが沙弓の表情はどこか悪そうに見えたが凜は先ほどの彼女の台詞に疑問点を抱いた。

「待て、風椿先輩“達”？　どういうことだ？　風椿先輩や私たち以外にも、こいつを狙っている奴が居るのか？」

凜の問いには和樹が答えることにした。当然沙弓と輝の方を出来るだけ向かずに、凜だけにその話を話す。

「神城さん、宮間夕菜って言う人が風椿先輩と一緒に来てるみただよ。たぶん目的は遺伝子だと思うけど……」

その言葉は終わらないうちに一筋の炎の竜が横切って行き、通り道を焦がす。それを見て和樹達はしばらく啞然とした。

「え？　今の何？」

和樹の疑問に答えるかのように開いていた扉から3人の人影が姿を現す。1人は泡を吹いて気絶している軽薄そうな男で、もう1人は顔を青くさせている玖里子。そして最後の1人は――

「かああああずうううううきいいいいさああああん
んんんんん？」

先ほどの愛らしい姿とは180度違う、少女の姿をした“何か”
がいた。

鍊金の戦士が彼女を知っていたらホムンクルス疑惑かけかねない

程に表情が化け物特有のそれに変わり果てている。

「み、宮間さん？」

和樹が呼ぶものの夕葉は足を進めるのみ。1歩ごとに何かが軋む音がした。

「その軽薄そうなナンパ男から聞きました。なに妻を放っておいて乳練り合おうとしてたんですか？　しかもその女ども2人と一緒にハーレムでも築くつもりですかあ？」

ホムンクルス顔負けの化け物特有の表情で近づいてくる。その腕には炎がとまり、いつでも放てるようである。

後ろで気絶している男と天を仰いでいる玖里子をよそに彼女は軋む音と共にこちらに迫る。

「和樹さんが誘拐されて私心配しましたし焦ったんですよ？　私の和樹さんリーダーが無かったらどうなったと思うんですか？　妻に感謝の1つぐらいあるでしょう？」

自分勝手な言い草に呆然とする和樹。それでも夕葉は歩みを止めようとはしない。

「さあ和樹さん、少し頭冷やしましょうか……？」

夕葉が両腕を振り上げ炎が竜の形を取る。その熱量は膨大で自分達では太刀打ちできそうに無い。

「終わった……」

和樹が呻いた瞬間、1人の少女の声が響いた。

「その程度でギブアップか？ カズキ、それは君らしくあるが、あの意味では君らしくないぞ。今回は相応しくないとと思うが、あえて言わせてもらおう——」

四筋の閃光が光り、全てが夕菜近くの地面を抉って彼女のバランスを崩させた。

「ハラワタ臓物をブチ撒けろ!!」

「え？」

「なんだと!？」

「どういうこと!？」

「今のは……?」

玖里子たちが呆然とする中、1人の少女が降り立つ。

少女の太ももには閃光の正体である四本のマニピュレーターが付いた鎌が精密に稼働している。

少女の服装はセーラー服で、鼻辺りに横一文字の傷が走っている。少女の刺々しい雰囲気、所為か魅力が損なわれるどころか逆に引き出していると言っても過言ではない。

「誰ですか!!」

夕菜の叫びにも少女は一切動じない。一方で和樹は安堵の声を出した。

「斗貴子さん!! 助かったよ!!」

彼女の名は津村斗貴子。和樹と同様錬金の戦士、そして今現在の彼のパートナーの1人であった。

第2話 来襲、誘拐、大暴走!?(後書き)

あとがき

まず一言。

自分で書いておきながらなんですが、神風ですら破滅に巻き込む
決闘万能説って一体なんでしょうか……

第3話 一先ずの終息

彼女との付き合いは短いけど密度は濃かった。

以前ある共同体を殲滅すると言う共同任務があつた際、最初こそ共同で任務を行っていた自分と彼女は方針から途中で敵対することになってしまったのだ。その時に自分は彼女の過去をある程度知つたが方針を変える事はしなかった。

最終的に協力者になつた元信奉者達の協力もあつてその共同体は壊滅したが、彼女は監視のために東にとどまることになった。

たまに自分と会つたり、まひろと遊んだり（遊ばされたり）するなど今でも交流を続けている。

だが何故津村斗貴子がこの場に着たのか……それは少し彼女の視点で話さなければならぬ。

話は和樹が夕菜と話している所に遡る。屋根の上を移動している少女の姿が見受けられた。

「全く、人使いが荒いな……」

そう言うと同時に彼女、津村斗貴子は屋根から屋根へと移る。その速度は速く、普通の人間では視認することすら出来ない程だ。

最近起こっている行方不明事件の調査に来てみれば、突然携帯が鳴り響き東側の戦士長……つまり和樹の父・式森和志から連絡があった。

『息子のデータが流出しちゃったらしくてね、ボディガード頼めるかな。あ、せっかくだし中学時代の知り合いって設定でいいよね。ちなみにブラボー君からも許可得てるよ』

その結果、自分は今泊まっているホテルから彩雲寮へ向かっている最中なのだ。

「カズキの護衛は重要だと思うが、素性がばれたら揃って芋づる式だぞ？ それにこういうのはカズキにも迷惑だと思うんだが……」

斗貴子の愚痴も何処か刺々しさは無く、むしろ満更でも無さそうな雰囲気だった。

「……急ぐか。先程から嫌な予感しかないからな……アレがそうか？」

そう言ったと同時に目的地である彩雲寮が見えてくる。

黒塗りの車が前に留められているが、既にやってきた刺客のものだろうと思いい様子を見ることにした。

そこへ和樹が慌てて彩雲寮から出てくる。彼も慌てて逃げ出したのがよく分かる光景だ。

「やれやれ……」

小さく笑って和樹の下へ近づこうとした瞬間、車の中から複数の黒い服を着た男が出てきて和樹を取り囲む。

その直後、和樹が何故か倒れて車の中に運び込まれてそして急発進。

かなり手馴れた動作だったことに驚いたが、彼のバッグと近くに落ちていた核鉄を回収し直ぐに後を追う。

「奴らは一体何者だ？ 早く追わねば……！？」

だがそこへ風の刃が飛び交い、近づくことがままならない。

見る見るうちに距離が離され、遂に見失ってしまった。

屋根の上に降りて核鉄で風の刃で負ってしまった己の傷を癒す。

「くそっ……どこを探せばいいんだ……？」

何故和樹を攫うのか、恐らく遣伝子のためだろう。だが見失った以上闇雲に探すのは危険だ。

そんな中、二人の女性が車の走っていった方向へ突き進んでいった。

ウェーブがかった金髪の女性が後を追ひ、ピンクのツインテールを靡かせた少女が怒りの表情で突き進む。

「ちょっと夕菜ちゃん、そっちでいいの!？」

「はい。私の和樹さんセンサーがこっちだつて言ってます!！」

少女は聞き覚えのある癢に障るような声で叫び、髪から生えてい
る触角が指している方向を信じて突き進む。金髪の女性も後を追
い、自分も探しようが無かったので彼女達の後を追うことにした。

そこでたどり着いた先は日本家屋、それも今では思い出すことも
困難だが昔住んでいた家を思い出すような古さだった。もしかした
ら戦国時代から建っているのかもしれない。

だが今となつては少女まで見失い和樹を1人で探すが一向に手が
かりはつかめない。

そこへなにやら炎の柱が起こり、自分が急ぐとそこには今にも炎
で焼かれそうな和樹と数人の女性がいた。

「終わった……」

和樹の上空を取った直後にその声が響き、彼女は小さく呟いた。

「その程度でギブアップか？ カズキ、それは君らしくあるが、
ある意味では君らしくないぞ。今回は相応しくないとと思うが、あえ
て言わせてもらおう——」

そう言つと地面へ向かう。そして刃を炎の竜へ向け——

「ハラワタ
臓物を」

そう言うと同時に鎌の照準を四方に合わせて

「ブチ撒ける!!」

攻撃を放ち消滅させる！！

「え？」

「なんだと！？」

「どういうこと！？」

「今のは……？」

四人が呆然とするのと、斗貴子が地面に降り立つのはほぼ同時だった。

「誰ですか!!」

ツインテールの少女の声が響くも斗貴子はそれを無視する。そんな中、この場で唯一の男性である和樹の声が響いた。

「斗貴子さん!! 助かったよ!!」

まぶ錬!!

序章編

第3話 一先ずの終息

「斗貴子さん！！ 助かったよ！！」

その叫びと同時に和樹は安堵の笑みを浮かべると斗貴子は凄みのある表情を一変させて小さく、それでいてハッキリと微笑んだ。

「カズキ、無事だったか」

和樹が泣きながら感謝すると、彼女に近づき肩を握る。

「斗貴子さんがいなかったら本当に死ぬところだったよ」

「相変わらず大げさだな……といたいだが、流石にあれを見てしまっただけで冗談に聞こえないな……」

「そうだよ、本当に死ぬところだったんだ」

「……やれやれだ」

2人のストロベリートークに周囲は誰も入れそうに無い。そんな中、1人の少女が怒りを露にした。

「和樹さん！！ その女は誰ですか！！ それと何で妻の前でストロベリーっているんですか！！ 浮気ですか、浮気なんですね！！」

夕菜が和樹と斗貴子に向かって叫び声を上げると、斗貴子に向けてウンディーネを先ほどと同じ竜の形にしてから放った。

和樹が女性と話をしただけで浮気と判断する辺り、ある意味妄想や電波も入っている。

とは言えその殺意や言動は人間型・動物型問わずホムンクルスですら裸足で逃げ出すほどであり、斗貴子はバルキリースカートを用いて防御しようとしたが、あまりの暴走に彼女も困惑気味だった。

「ウンディーネエエエエエ！！！」

夕菜が叫ぶと同時にウンディーネを無差別に放っていく。流石の玖里子達もこれには成す術も無く逃げまわっている。

「流石にこれはマズいな……」

確かに和樹は人を傷つける力を持つとはしない。だがいくらなんでもこれは行きすぎだ。だが今の自分には核鉄が無いから武器が……

「カズキ、君に渡したいものがある」

斗貴子の声を聞いて振り向くと、自分の手に何かが握られる。そ

れは間違えようの無い、自分の核鉄だった。

「これは……僕の!？」

「攫われた時に落としたのだろう。これを使い」

「何をまた、こそこそこそ話しているんですか……」
「？」

夕菜の形相が再び変化する。歩くごとに地響きがしたが気にしたら負けだと思っであえて思考から外す。

そして彼は持っていた核鉄を手にしてから息を吸い込んで彼女を止める意味でも目つきを鋭くさせる。

「武装!! 錬金!!」

その声と同時に、和樹の手の中に金属状のブロックが展開されて1つの形を成していき、徐々に突撃槍ランスの姿を成していく。槍だけでなく赤い飾り布も構成され、見るからに重そうな“それを和樹はそれを棒切れのように振るう。それを合図に飾り布が輝きだし、ウンディーネや瓦礫がその直撃を受けて霧散していった。

「なっ！？　どうして邪魔するんですか！？」

夕菜はさっきの槍に対しても恐れを抱いていないが、一方で夕菜と斗貴子以外の女性陣は呆然と目の前の光景を見つめていた。

当然だろう、先ほどまで手の中には何も無かったのだが、突然巨大な槍が姿を現したのだ。

それを見て呆然としない方がどうかしている。

「ちょ、何よそれ？」

玖里子が目の前の槍を見て何がなんだか分からない様な表情をする。

「貴様、いつの間に槍を！？」

凜が槍を見て目つきを鋭くして、刀をいつでも抜けるように柄に手を添える。

「何で今まで出さなかったの？」

沙弓は口調こそ冷静だったが、目の前の光景に動揺が隠せない。

「……」

輝はそれをただ見据えるのみ。

「もう許しません！！泥棒猫共々浮気者にお仕置きします！！」

その声を合図に右手に炎の竜、左手に水の竜を生み出す夕菜。それを見た和樹は槍に込める力を強くした。

「カズキ！！」

斗貴子の叫びを合図に和樹も頷きを返す。

「僕が隙を作る。その隙に！！」

そう叫ぶと和樹は飾り布にエネルギーを込め、それと同時に飾り布が輝き始める。正に太陽の光の如く光を放っているではないか。

「輝け！！ 僕の武装錬金・サンライトハート！！ サンライトフラッシュャー！！」

それと同時に飾り布から太陽の様な輝きが放たれ、周囲を照らす
！！

「きゃ！？ な、なにを……」

突然の閃光に夕菜の集中力は途切れ、そして炎と水で創られた2匹の竜は消滅した。

だがそんな彼女を気にもせず斗貴子が夕菜の背後を取った。

「しばらく眠っておけ」

そしてバルキリースカートの峰が夕菜の首筋を叩いて気絶させた。

「有難う。サンライトハート」

和樹がサンライトハートに礼を言って消し去り、二人は呆然とする凜たち三人と夕菜の近くにいた玖里子を見据える。

「カズキ、彼女たちをどうする？」

バルキリースカートを戻した斗貴子が彼女達に眼を配りながら言う
と、和樹が小さく言う。

「あー……」

すっかり忘れてたと言う風に呻く和樹。とは言え玖里子達も何かなにやらと言うような表情で和樹を見据えるのみ。

だがそこに騒ぎを聞きつけたのか複数の人間達がこぞってやってきた。腕に炎を灯している事から神凧一族の術者なのだろう。

「弱ったな……ここを切り抜けられる自信はないぞ」

斗貴子も小さく息を吐いて戦闘態勢に入る。だが流石戦闘のプロと言つべきか神風の術者に一部の間も見えない。

互いに相手を見据える中、それを破る声が響き渡った。

「お前達、ご苦労だった」

聞き覚えのある声が響くと囲んでいた術者の一部が道を開けるかのように動く。

「……雅行の奴が式森がどうたらこうたらと言っていたが、まさかここまでやるとはな……子が子なら親も親と言つわけか」

そして1人の男がこちらに向かってくる。和樹は彼を知っていた、何しろ彼は自分達の担任なのだから……

「冴木先生……」

術者たちの群れから現れた不機嫌そうな男・冴木春斗は目つきを鋭くさせて和樹に向かって言い放った。

「話したいことがあるのだろうか？ 私の本拠地で話そうか。ああ、静、輝様に服を着せてやってくれ」

そう言つと彼は静と呼んだ女性の術者を輝の近くに向かわせた後でこの場から離れる。和樹たちも慌てて彼の後を追ったのだった。

神風家敷地内にある春斗の本拠地……もとい八神家。その中にあ
る冴木春斗の部屋にて彼は小さく息を吐いた。

「最初に言わせてくれ、本当にすまなかった」

向き合った直後に春斗は和樹と斗貴子に向かって土下座する。

「まさか神風があそこまで馬鹿げた事をするとは思っても見なか
った。現在輝様は身内が説得している」

どうやら彼は先の誘拐騒動について何も知らなかった……と言う
か反対側だったらしい。

彼は神風が輝を使うと言った時に重梧の元（本来は輝の父親でも
ある敵馬の方にも行きたかったが不在だったらしい）へ真っ先に向
かい取り消すよう説得していた。

今回の話を持ちかけ、和樹の誘拐まで行った大神雅行と言う人物

を殴り飛ばした時、外の騒動を聞いて駆けつけたと言うわけだ。

「……今回の侘びとは言わんが私が溜め込んだカードを今日余った分含めて好きなだけくれてやる。必要ないと思ったら行きつけのカードショップを教えてやるからそこで売って来い」

「いいんですか!？」

「私のデッキとは相性が悪いカードばかりだから別に保管してあるんだ。仲間達もデュエルモンスターズをしているからな。お前はどついうデッキを使ってるんだ?」

春斗の声を合図に和樹は小さくなる。和樹は今までカードゲームをあまりやらなかったので、持っている枚数が少ないのだ。

「その……お言葉ですけど、僕あまりカードを持ってなくて……」

「……そうか。そう言えば兄が『新しいカードのテストを頼みたい』って言ってたから頼めるか?」

和樹が頷きを返すと、春斗は斗貴子の方に顔を向けた。

「すまないな式森、カードではなく後で別の形で借りを返そう。

それとだ、お前は誰だ? 葵学園の生徒では無いようだが……」

「あ、ああ。私は津村斗貴子。式森和樹の……何と云えばいいのか、その、中学時代の友人だ」

「中学時代の、か」

春斗はそう言う小さく息を吐く。そして彼は襖を開けて隣の部屋へ向かい、しばらくしてから段ボール箱を持ってくる。

「それは?」

「ああ、使わないカードをデッキケースにまとめた奴を入れる段ボール箱だ。コイツは……ドラゴン族編だな。今日手伝いを頼んだから同じ種族でいいな？」

そう言つて段ボール箱を和樹の前に置くと、和樹にいくつかのケースを渡す。和樹は思わず眼を瞬かせ春斗に向かって頭を下げる。

「あ、どうも……でも、何でカードがこんなにも……」

「コイツは玲奈さま……輝様の御母上が生前に集めていたカードだ」

「ええ！？ い、いいんですか！？」

「あの方なら笑つて許すさ、現に私もその1人だったからな。ま、今では自分の金で買っているが」

和樹は春斗の好意に甘え、デッキケースからいくつかのカードを取り出していく。

一方で春斗も机の近くに置かれている椅子に座つてデッキの調整（本人曰く再調整）を行っていた中、和樹が声を上げた。

「そういえば冴木先生、さっきと学校で八神さんの呼び方が違いますよね？」

和樹の記憶が正しければ彼は輝のことを葵学園ではただ『八神』と呼ぶだけだったが、ここでは彼女のことを『輝様』と呼んだのだ。

「仮にも学校で教師が生徒に敬語を使うわけにはいかないだろう、風椿の例があつてもだ。それに彼女は俺達の親代わりで決闘を教えてくれた人……玲奈さまだが、その人の実娘だから借りがある」

今度は春斗自身の一人称が変わつた。真剣な表情をした春斗は気

づいてないが気にした様子も無く言う。

「今度は俺からの質問だ。お前から見て八神輝はどう見える？」

「え？ 運動神経抜群で頭もいいし、スタイルも顔も文句ありません……ただ追那人つてことには驚きました。けど……」

「けど、何だ？」

「……なんか彼女、さっき僕が見た限りじゃ『神風の発展を第一に考えて、自分のことはどうでもいい』としか見えません。仲丸が冗談で言っていた『洗脳』って言葉が冗談じゃないって思えてきましたよ」

その言葉を聞くと春斗は小さく息を吐き、デッキをいじる手を止めた。

「神風の発展が第一、か……」

そしてため息を吐く春斗。その顔は暗く、普段の姿とはまるで違う。

「……式森、俺はあの老害と無能宗主と交渉した結果、遺伝子の件を任せられた。まあ、遺伝子とかふざけた事を言いやがった雅行は殴り飛ばしたかな。尤も、化石頭がいたらやばかったかな」

その言葉に和樹はカードを集める手を止める。『任せられた』と言う言葉を使う事自体が不自然で、諦めたのなら諦めさせたと言うはず。

「まさか……諦めてないのか？」

斗貴子の答えに対して春斗は小さく息を吐いて答える。

「その通り。まあ、これで腐りきった奴らに輝様に手を出させない大義名分が出来たから文句を言う気などない。昔も輝様が襲われた事があってな、まあ主犯格以外殺しつくしたが残ったそいつは今も搜索中だ」

物騒かつ思いもよらなかったその言葉に和樹と斗貴子は啞然となつた。

春斗も忌々しげに表情を歪ませていたが、顔を手で覆うと溜息を吐いて言う。

「だが、別に『今手に入れる』とは一言も聞いていない。それに神風がお前と輝様の子を得てその子供が強大な力を持ったとしても、その時まで神風そのものが存在できるかも怪しくなってきたからな」

「え？ それってどういう意味ですか？」

和樹の疑問に春斗が子供に簡単な式を教えるように答える。

「自業自得とは言え神風には敵が多い。内部でも俺達や風牙衆など反乱分子がいるし、外部では霊狩人^{たまかりうど}を筆頭に反神風同盟が組まれているほどだ。霊狩人の幹部は少なくとも俺と互角の人間が最低10人近く集めているし最下位ランクも神風と比べ物にならない。今や東京は爆弾がいつ爆発してもおかしくない危険地帯だから」

神風が霊狩人に勝つ可能性など無いと暗に言う春斗。一方で春斗は小さく息を吐いた。

「それに俺個人、この件を任せられる事が最大の目的だったからな」

「？」

「今までと矛盾するがいい案が思い浮かんだから遺伝子を手しようと思っている」

その言葉に2人は呆気に取られる。すると春斗は小さく笑った。

「だが急いで入手しようとして逃げられたら元も子もない。最初はお友達』からだ、神風の命令の方は焦らずのんびりで行かせてもらうよ。ま、先にお前が輝様以外の女を好きになってもお前の自由だからな」

要するに春斗は命令を逆手にとったのか。確かにいきなり婚約だの何だの言われてもパニックになるだけだが、お友達なら問題ないと判断したようだ。

「ま、これからもよろしく頼むぞ式森」

そう言つて春斗は己の話を終えて再びデッキの構築に移った。一方で和樹は欲しいカードに手を伸ばしてデッキを作り上げていく。するとそこへ残った5人娘が入ってきた。

「来たか」

「ええ冴木先生。早速ですけど式森和樹君に質問がありますわ」

そう言つて5人を代表して風椿玖里子が前に出て言い放った。

「あんたさつき槍出していたわよね？ あれは何なの？ 命削らないの？」

「ああ、それは僕の武器。使用回数は一切消費しない僕の相棒ですよ」

「質問に答えていないわよ!!」

玖里子は和樹の答えに不満があつたのか大声を上げるが、そこで春斗が呆れたように声を上げた。

「あいにくだが風椿。彼は『あの武器が何なのか』と言う事と『命を削らないのか』と言う質問に答えているぞ」

「それは屁理屈です!! それに私はあなたに言った訳ではないわ!!」

「神城、杜崎、説得の方は？」

春斗の視線に2人は曖昧な返事をよこす。それを見た春斗は盛大なため息を吐いた。

「失敗、か？」

「長老方は命令を撤回するつもりは無いみたいです」

そう言つて輝は春斗を見据える。

「言つておくが今回の件は私に一任されているぞ」

「長老の厳命は宗主と厳馬様以外誰も異議を挟むことは出来ません。式森和樹は私の飼い主だと言う彼らの認識をお忘れなく」

ぼやこうかと思つたが春斗は小さく舌打ちをしただけ。どうやらその事を忘れていたのかもしれない。飼い主発言に頭を痛くした和樹は今度は夕菜に目を向け――

「飼い主ですって……？ 和樹さん、どういうことですか」

「落ち着け、神風の大半はとつくの昔から錯乱しているしアルツハイマー症候群に羅漢している。さつさと療養して（ぶちこまれて）

もらつか、いい年なんだから隠居して（くたばって）ほしいんだがな」

「あの……」

春斗の隠そうともしない本音に輝の表情も険しくなるが、斗貴子が盛大にため息を吐く。

「で、どうしてキミ達はカズキの遺伝子がほしいんだ？」

「そうよ。ところで自分の先祖の事、知ってるかしら？」

「昼ごろ冴木先生のカード整理の手伝いをやってその時に聞きました」

自信満々の玖里子も和樹の台詞に凍りつく。しかし直ぐに持ち直して自分の事情を話した。

「知ってるなら話は早いわね。あたしの家って成り上がりだから、古株の床島や神風とかに睨みを利かせる何か欲しいってことになったらしくて、それであんたの遺伝子をちょこつともらっちゃおうかな、なんて」

軽い口調で玖里子は言うのだが、周囲の空気は凍り付いたままだ。

「凜や杜崎さんの家、神城家と杜崎家は旧家で伝統あるけど、最近は退魔関係でのごたごたや決闘者に鞍替えする人たちが多いから低迷が続いてるからね。神城と杜崎は犬猿の仲だし互いを蹴落とすため、新しい血を入れようということになったんじゃないの？」

「確かにそう言われたがな……」

「彼を娶る事でどうにかなるのかしら？」

二人はやる気なさげの表情で言う。一方で玖里子は輝に目を向けた。

「確か神凧も似たような理由で衰退の規模は神城や杜崎よりも悲惨よね？ 最近宗家や分家でも炎術が使えない人が多いみたいだし、特に最近は霊狩人たちが勢力を伸ばしているから確実に和樹を虜にするために輝を出した、ということかしら？」

「そうなるわ」

『だから何』と言いたげに淡々と言う輝に対して玖里子は冷や汗を流し、夕菜に目を向ける。

「でも宮間家が一番悲惨よ。最近は高額出費とかスキャンダルとかで衰退の一途を辿っているし、今まで続いていた足長オジサンからの援助金が遂に打ち切られたって聞いたわ。このままじゃ滅ぶから遺伝子を……ってところでしょ」

玖里子の声に対して夕菜は言葉を詰まらせる。どうやら事実のようだった。

「なるほど。お前達の言い分は分かった」

斗貴子が目つきを鋭くし小さくつぶやいた。

「分かったが私の本音は『お前たちはもう二度とカズキに関わるな』と言いたいな」

この言葉に怒りを露にする夕菜。一方で玖里子は斗貴子に向かって問いかける。

「それってどういう意味かしら？」

「カズキはお前の物じゃない、“ちょこつと”などと言っな！！」

斗貴子の言葉に玖里子は頭を抱えたが、続けて凜と沙弓を指差す。

「次にお前たちだ！！ 八神輝がカズキと結婚するのが嫌ならば説得するなり引き止めたりするなど方法がいくらかもあるだろう！！」

下手すれば凜よりも小柄な少女に対して沙弓はグウの音も出ない。続けて輝に向き直って先ほどの三人以上に強く言い放つ。

「大体お前もお前だ！！ 『神風繁栄のため』だとか『宗主や長老の命令』とかではなく少しは自分で物事を考えろ！！」

だが輝は堪えていないのか平然としていたので今回は無視して最後に夕菜の方に顔を向ける。

「そして最後！！ 初めて会った筈のカズキとお前がいつ夫婦になった！？」

「初めてじゃありません！！ 前に会ってますしキチンと約束してます！！」

「嘘をつけ！！」

「私がこんなにも覚えているんですから、和樹さんだって覚えてますよね！？」

『それはストーリーカーの理論だ！！』

さすがに春斗も声に出して反論し、和樹は彼女をなだめる。

「ま、まあまあ、落ち着いてよ宮間さん」

「和樹さん、どうしてその傷女の肩を持つんですか？」

その言葉とあの時と同じ雰囲気にと樹は息を呑む。すると夕菜は炎を腕に宿した。

「そうですか。浮気ですか。浮気なんですね？ 私のことを愛しているはずなのに和樹さんは浮気するんですか」

再び顔をホムンクルス顔負けの表情にする夕菜。そして彼女が炎を放とうとした瞬間――

「部屋の中で火い出すな！！ カードを燃やそうとしてんじゃないえ！！ 何考えてんだこの電波チンクシャがあー！！」

青筋を浮かべ形相を鬼の顔そのものに変えた春斗が咆哮を上げ、夕菜の襟首を掴んで家から叩き出した。

和樹と斗貴子は素の春斗を見て啞然としていたが、凜と沙弓に輝は知っていたのか平然としていた。そして和樹達は寮へ帰り、岡倉たちから詰め寄られてようやく帰ってこれたと言う感情を強くした。

後日談――

1・夕菜は春斗や彼の仲間達によって抑えられ、「雪を見せてくれたじゃないですか！！」と訳の分からない言動を続けていたが駆けつけた警察に連行されていた。

2・春斗は夕菜を投げ飛ばした時の口調が素である事、そしてかつて葵学園のOBで札付きの不良だった事が分かった。

3・彼女が神風で起こした騒動の損害賠償は全額宮間家から支払われる（交渉は何故か難航したが頼道がやってくれました）事になり、問題の「雪」発言に関して和樹は盛大に首をひねり続けたと言う。

第3話 一先ずの終息（後書き）

あとがき

ここで夕菜初逮捕です。夕菜もよく原作で逮捕されないよな……まさか宮間家が保釈金払っているってオチじゃないですね？学校内ならまだしも、学外でも破壊活動やらかしてますよね！？

最終話 崩れ去る日常（前書き）

最終話とかかれてますがまだまだ続きます。

最終話 崩れ去る日常

すったもんだの末の翌日――

「よう和樹、昨日は散々だったな」

通学路で岡倉が真剣な顔つきで和樹に向かって言った。それは昨日の屋上と比べるのが失礼なほど真剣な表情である。

「うん。でもまあ、今度冴木先生から新しいカードもらえるしラッキーかな？」

「和樹君、神経が図太い以前の問題だよそれ」

大浜が呆れると岡倉が顔を近づけさせる。どうやら自分だけカードをもらった事に不公平だと感じているようだった。

「……御免岡倉、抜け駆けして……」

「ま、今回はしゃあねえわ。でも次は俺達も呼ぶように」

「ラジャー」

そう言つて敬礼する和樹。すると和樹は盛大にため息を吐いた。

「そうなんだ。ところでまひろちゃんの方は大丈夫だったの？」

「大丈夫だったみたいだよ。狙われたのは僕だけみたいだし、まひろはああ見えても大魔術師になれるほどの魔力量だからちよっかい出すのは危険だと思ったんじゃない？」

「ま、データだけを見ればそう思うな。実際のまひろちゃんはアレだけど」

そう言つと全員の脳裏に笑顔でお花畑を散歩しているまひろの姿が思い浮かべれた。しかも周りには蝶々などが飛んでいる。

「……神城さんと杜崎さんは僕が八神さんとくつつく事が不満だったみたい。だから同盟組んだわけだし……」

その言葉に岡倉の表情が青くなる。何か周囲を気にしだしたのだ。

「どしたの？」

「……一応八神さんは優等生だ。あの美貌とスタイルだし運動神経も抜群で頭脳明晰、お前から聞いた『炎術至上主義』って言うあの種の洗脳を除けば動物好きだし可愛いものを集める趣味を持っている」

「そうなんだ……」

何しろ和樹。輝と直接接したのはアレが最初だったのだ。詳しく知っている方がどうかしていると思う。

「まあ要するにあの儂げな雰囲気だ、ファンクラブが作られるほど多いんだよ。メンバーの大半は女子だけだな」

「それと顔を青くする事が何か関係でも……」

その声を合図に岡倉はひそひそ声で言う。

「いいか、ファンクラブの中でも幹部は彼女の素性を知っているんだ。彼女を護るためなら誰であっても容赦しない戦闘集団だ、ぶっちゃけお前の親父みたいな強い奴でも怪しいんじゃないかって思う」

ちなみに岡倉たちは中学の頃にホムンクルスの共同体殲滅任務に

巻き込まれ、和樹たちの素性を知っている。

「よく知ってるね。誰から聞いたの？」

「……鼻の下伸ばして襲われた事がある。その時『八神輝ファンクラブ被害者の会』に誘われてな……」

ゴメン岡倉、トラウマスイッチを押しちゃって。

「ま、まあ斗貴子さんも来てくれたみたいだし大丈夫だと思うよ？
冴木先生も味方になったわけだしさ、拉致監禁なんてことはもう無いと思うよ」

大浜が言っていると和樹も頷く。すると殆ど無言だった六舛が口を開く。

「等と言ってる間に既に校舎前」

『うおっ！？ いつの間に！？』

話し合っている間に既に学校前に来ていたようである。

まぶ錬！！

序章編

最終話 崩れ去る日常

同じ頃、春斗は輝と別れた後で校長に呼ばれたので校長室に入る。

「校長、失礼します」

「ああ、冴木くん。よく来たね」

そう言つと同時に校長は席に座るよう促し、そして書類を手渡そうとしたが、突然欠伸を上げたことによって目を見張る。

「どうかしたのですか？ 冴木くん」

「いえ、少し家の方で厄介事がありまして……」

「そうですね。あなた以外にB組を任せられる人間は今のところいませんので、前担任のように身体を壊さないように気をつけてください。で、本題の方ですが……」

自分は担任ではないのだがと春斗が言う前に校長が今度こそ書類を春斗に手渡す。

「これは一体？」

「ええ。実は君のクラスに1人転入生が加わる事になりました」

その言葉に春斗は眼を瞬かせた。

「……何故わざわざ私のクラスに？ まさか問題児だとか？」

「いえいえ絵に描いた様な優等生ですよ。品行方正、成績優秀、才色兼備」

「だったらなおさらF組に入れるべきでは？ 別に私はF組にある2人の様な生徒が増えても文句は言いませんが……」

ちなみに輝は例外で、校長以上の権力を持つ保険医である紅尉の協力を得て自分が受け持つB組に入れたのだ。

余談だが、B組には入れないように裏工作をしている教師もいるらしい。

「ええ……本来は認められないんですが多額の寄付金を頂きまし

て……断れなかったのですよ」

「……分かりました。自分も似たようなものですし、いいでしょう」

「詳しい事は中の書類に書かれていますので……」

そう言つと同時に春斗は書類を見る。しかし、即座に眼を丸くした。

「前言撤回……完全に問題児じゃねえか……どこが品行方正なんだよ？」

「どうかしましたか？」

「いえ何でも。本当にコイツ……失礼、この子が家のクラスを希望したのですか？」

「ええ、それとある一文についてですが、本当かどうか問いたただしてください」

それを聞いて春斗は書類を、正確には書類に書かれたある一文を何度も見直す。

しかし何度も読み直しても間違いではないと証明するばかりだった。

「……分かりました。HRが近くなるので私はこれで」

「ご苦労様です。冴木先生」

春斗が校長室、そして職員室から出ると同時に顔を天井に向けるとポツリと言う。

「服部、そこにいるんだろう？」

「……やっぱりバレバレっすか？」

そう言うと同時に天井が一部落ちて、1人の青年が顔を出す。

彼の名は服部昌也。

彼が受け持つクラスの生徒で、戦闘している場面をつつかり見られて以来自分の弟子になろうと押しかけている人物。

「話を聞いてたのか？」

「もちろんっすよ師匠！！」

そう言うと同時に服部が天井裏から降りると春斗は上を見上げる。いつ隠し通路を作ったのか気になると言えば気になるが有効に使えそうなので放っておく。

「まあ、お前の情報収集能力は買っている。アレも悪用しなければ私はそれでいい」

「師匠、そのうち俺の戦闘能力も認めてもらうつすよ！！ それに悪用したのがばれて破門されたらそれこそ最悪っすよ？」

そう言うって服部は笑顔を見せる。その顔にB組特有の腹黒さはなく、在るのは純粹さのみだからタチが悪い。

もし不純さがあつたら即座に殴り飛ばしているのだが。

「早く行け。私は少々用事がある。そうだ、お前はしばらくひ… 八神の行動を見張ってくれ」

「え？ 八神さんって……確か師匠の……」

「私だっけ年がら年中一緒にいるわけではないんだ。それで彼女が妙な行動を取ったら即座に報告しろ、いいな？」

春斗が命令すると同時に、服部は慌てて教室へ向かった。

さて、一方B組教室。

「さあさあ、賭けた賭けたあ！！」

和樹達が急いで教室に来てみると黒板にはデカデカと倍率などが大きな文字が書かれていたし、仲丸が大声を張り上げていた。

「今日転校生が家のクラスに来るぞお！！」

「見知らぬ男子を見たって言う情報もあるぜ！！」

「本当かよおい！！ 証拠見せろよ証拠を！！」

「よせ！！ あの鳴尾の事だから信用できねえぞ！！」

教壇の前に陣取っている仲丸と浮氣の声に対して周囲は喚く。一方の和樹たちは小さく息を吐くと即座に知り合いを見つけて声をか

けた。

「駒野、なんだこれ？」

六舛がデツキを組んでいた駒野の方に向かうと、彼らは小さく呻いた。

「何でも、転校生が来るらしいぞ。しかもわざわざ、うちのクラスを指名したそうだ」

その瞬間、和樹の背筋から嫌な汗が流れてくるのを感じた。だが仲丸が再び話しかけてきたので直ぐにそれは吹き飛んでしまう。

「式森、お前はどっちに賭けるんだ？」

「うーん……」

男か女か考えている間に輝が教室にやってくる。

今日は猫耳と尻尾を生やしていない姿だったが、彼女の首には変わらず首輪が着けられている。

「あ、八神さん……」

気まずい。昨日下着姿まで見たせいか顔を合わせづらい。

当の彼女は自分を一瞥しただけで即座に自分の席に着いたのを見て、昨日のアレは夢だったのではないかとも思える。

そんな中、続けて服部が走りながら入ってきた。

「服部、お前何か知ってるか？」

B組一の情報通で男子生徒の中で一番冴木春斗と接している服部

に聞いても彼は目をしばたかせるのみ。

「俺もあんまり知らないっすよ」

「ちっ、使えねえな」

そう言っただけ丸は和樹たちから離れる。すると服部が輝の方を横目で見ているのに気づいた六舛が声を上げる。

「八神さんがどうかしたのか？」

「師匠から行動を見張られて言われたっす」

そう言っただけ服部はコンビ二握りを食べる作業に移った。それでも目は輝から離そうとはしていない。

彼の名は服部昌也。

自称忍者の末裔と名乗っているがその実態は靴屋の息子でB組マトモ男子六傑最後の1人。

学んだ忍術は全てがエセ書物やら漫画にゲームで、しかも身体能力もそれに近くなったツワモノでもある。

彼は輝や駒野に丸らと同じ中等部からの継続組であり、春斗の弟子になろうと意気込んでいるB組で1番純粋な心の持ち主でもある。

そして後で知った事だが春斗の素性を知る数少ない人間でもあった。

「……今は特に問題なしっすか……そろそろ師匠も来るころっすね」

服部の言葉を合図に春斗が教室に入ってくる。その手には名簿が握られており、気のせいか目つきも鋭い物になっている。

しかし、すぐに呆れかえった表情に変化した。

「お前たち、ギャングルをやるのは勝手だが黒板の文字ぐらいは消しておけ。それと知ってるだろうが転入生の宮間が入ってくる。苗字は本人が何をほざこうが宮間だから、奴が妙な事ほざいても騒ぐな、静かにしろ。いいな？」

念押しに言うと同時に周囲が黙り、和樹は昨日あのホームクルス顔負けの化け物と化した少女の名前を聞いて頭を抱えた。それを確認した後で納得していない表情で春斗が扉の方に顔を向けた。

「よし宮間、入って来い」

そう言うと同時に春斗は中指を曲げて入るように促す。開かれた扉から入って来たのはあのツインテールの少女、宮間夕菜だった。

（やっぱりあの宮間さんだよ……確か警察に捕まったんじゃない……？）

和樹の疑問をよそに周囲のボルテージは上がっていく。

「ウオオオオオオオオオオオ！！！！」

仲丸を初めとした男子が盛大に叫んだのだ。

『可愛い！！』だの『可憐だああああ！！』などと叫ぶ者もいるし、中には『俺たちのクラスにも清纯派アイドルが来たああああ！！』と叫ぶ者もいる。

まあ、確かに輝は清纯派とは違う感じがする。清纯派だろうが武

闘派だろうがいきなり人前で下着姿になるはずが無い。

「騒ぐなと言ったはずだ。では宮間、自己紹介を真面目にやれ、分かったな宮間？」

念入りに苗字を何度も言う春斗だったが、すぐに夕菜にチョークを手渡す。すると彼女はかなり手馴れた手つきで自分の名前を書く。そこまでは良かったのだが、彼女はココで核弾頭を落としてくれた。

「皆さん、始めまして。宮間夕菜といます。皆さん、これから夫の和樹さんともどもヨロシクお願いします」

そして、沈黙は氷河期と化した。しかし、それはすぐに溶け、即座に爆発した。

「な、なんだってええええええええええ！！！！！」

一方の春斗は眉間に皺を、米神に青筋を浮かべながら夕菜に向かって言った。

「宮間。私はココに来るまで真面目に自己紹介しろと何度も何度も何度でも何でも何でも何でも何もな・ん・ど・も言った筈だが!？」 お前の耳はアレか？ 人の言葉が右から左に出たり左から右に出たりするのか？ 長い海外生活で日本語が理解出来てないのか？ どこかの眼鏡野郎の様に『ボク海外暮ラシガ長カッタカラ日本語忘レマシタ』なんていうボケを言わないでくれよ?」

春斗の問いに夕葉は眼を瞬かせて首を傾げた後、怒りながら言う

た。

「失礼ですね！！ 何度も言われたから真面目に和樹さんの妻だ
って自己紹介したじゃないですか！！ 本当は式森夕菜って言おう
としたんですけど、あなたが宮間宮間宮間って言い続けて名乗れな
かったからこの様にしたんですよ！！」

まるで彼が間違っていると言いたげな彼女の言葉に春斗は教壇に
頭をぶつけた。

恐らく彼は痛感しているのだろう。彼女には世間一般の常識が一
切無いと言うことに。

このままでは周囲の和樹に対する怒りが爆発する。誰もがそう思
った中、誰かの声が響き渡った。

「みんな、彼女の言う事は間違ってるわ」

そう言って立ち上がったのは八神輝だった。彼女を見た夕菜は顔
つきを険しいものに変えて彼女を指差す。

「あ！！ あなたは！！」

「だって式森君は——」

「お前ら！！ 誰でもいいから金の話でもテストの答案流出情報
でも最新カードパックの中身の情報でも何でもいいから2人の話題
を消せ！！ 早くしろ、後悔しても知らんぞ——！！」

「そうよ！！ 輝はともかく頭の可哀想な人の言葉なんて信じる
必要ないわ！！」

「杜崎い！！ それじゃあひか… 八神の言うことが正しいって事
になるぞお！！」

普段B組の暴走を止める側の春斗や沙弓らしかぬ話の振り方に誰もが目をしばたかせ口が動かない。

だが彼らの祈りや命令もむなしく2人はほぼ同時に口を開いた。

「和樹さんに下着姿で誘惑した獣女!!」
「私のご主人様だもの」

先ほど以上の氷河期の大寒波が訪れる。クラス中の視線が和樹に向かれ、春斗は頭を抱えていた。

「何で普段は騒がしいくせにこっぴつう時は静かになるんだ……」

春斗の呟きなど誰も聞いてはいない。仲丸が錆びた機械人形の如く首を動かし和樹をにらみつけた。

「式森、どういうことだ……！？俺でさえ冴木の野郎やファンクラブに制裁喰らったんだぞ？何故お前は生きている……！？」
「神風に攫わ「神風とグルだったのかお前！？」んだけど……」

和樹の答えを遮って仲丸が叫ぶ。そして彼は両腕に魔力を込めて和樹に飛び掛った。

「貴様が八神さんを手籠めにしたと言っただけで十分だ！！仲丸バックブリーガー、死ねえ！！」

仲丸が抱きしめる状態で締め付ける。徐々に魔力と腕の力を強くして和樹の腰をへし折ろうとした時――

「和樹さんから離れてください、このガチホモ!!」

夕菜の火球が仲丸の後頭部に直撃する。それを切欠に和樹は拘束から解き放たれて即座に逃げ出した。

「あつ!! 待て!!」

「血祭りに上げてやる!!」

「ミンチだ!! 肉屋に売りさばいてやる!!」

「とっ捕まえてB組裁判にかけてやれ!!」

B組男子大部分も続々と和樹の後を追っていく。頭を抱える春斗を筆頭にB組女子大部分と男子一部分が取り残された。

ちなみに踏まれ続けた仲丸はいまだに目を覚まさない。

「……今日は休校だな。帰って寝るか……その前に行きつけのカード屋へ行つてシングルカードでも買おう……ああ、八神は説教するから一緒に来い」

そう言つて春斗は輝と共に教室から去る。一方で六舛たちも和樹の後を追う事にしたのだった。

「あゝゝゝ、宮間さんも八神さんも何考えてんだよ」

一方、和樹は屋上で小さく息を吐いていた。

「何がどうしたんだ？ カズキ」

和樹が呻く中、貯水塔の上から1人の少女の声が響いた。すると彼は小さく顔を綻ばせた。

「ああ、斗貴子さん」

和樹が顔を綻ばせると、斗貴子は小さく和樹に問いたです。

「どうしたんだ？ 今は授業中だぞ？」

「それが潰れちゃってさ。原因はほら、昨日の……」

和樹が角を生やす動作をすると、一方の斗貴子も理由を納得した。

「あの女か？ だが、先日春斗殿が逮捕したはずでは……」

「僕だって知らないよ。まあ、それだけならよかったんだけど……」

「……」

深々とため息を吐く和樹。すると斗貴子も首をかしげた。

「どういうことだ？」

「八神さんの事まで話しちゃってさ……しかも八神さんも認めるような事言っただけ」

流石の斗貴子も盛大にため息を吐くしかない。

「あの女も何を考えているんだ……？ 宮間はまだ自分のことしか考えていないからまだわかるが、あいつは『神風の命令』で自分を抱いてもいいと言っただろう？ 自分の事など二の次ではないか……！」

斗貴子は長老と言う男に対して怒りを覚え、歯軋りを立てた。

「確かに八神さんはきれいだったよ。それは素直に認める」

「カズキ……！！！」

愕然とする斗貴子に向かって和樹はものすごい綺麗な笑顔で言った。

「でも、僕にしてみたら斗貴子さんの方が綺麗だと思うな」

和樹の声に斗貴子は盛大に頬を赤らめた。

「カ、カズキ！？ な、何を言って……！」

彼女の表情もどこか刺々しさは皆無だ。それどころか周囲からはストロベリーな空気が漂ってくる。しかし、そこへ1人の命知らずが入ってきた。

「こんなとこにいたのね、かず、き……」

その人物は、以前自分を襲おうとした風椿玖里子だったが、彼女の足はストロベリー空間を築き上げている2人の方へ進むことを拒んでいる。彼女が霊符を投げつけるものの、何故か届く前に消滅してしまう。それを見た玖里子は息を呑んだ。

「うゝん。思ったよりも強敵ね……」

「玖里子さん。何唸っているんですか……」

するとそこへ数人の女子が入ってきた。

1人は神城凜。もう1人は杜崎沙弓だった。

「ええ。あれよ」

そう言うと同時に玖里子は和樹たちの方を指差す。一方で彼女たちは小さくガッツポーズをしていた。

「あれなら間違いを起こす心配はなさそうね」

沙弓が装甲を外して笑うと――

「それもそうだな。輝姉さまに近づこうなんて思わないでしょう」
凜も刀を納めて笑う。

「あんたたち、それでいいの？」

玖里子は頭を抱えた。それを聞いた二人は何故か怪訝そうな顔をして言う。

「それでいいと思いますけど……」
「どこか間違っているのかしら？」

それを聞いて玖里子は考えを放棄し、今度は沙弓が玖里子に向かって言う。

「で、どうしてココに？」

「実はB組が和樹を探して暴れててね、全部休校よ。生徒会は生徒会で今回の事態の收拾に全力を尽くしてるから帰れないけどね」

そう言っただけで和樹に向かってウィンクをする玖里子。一方の和樹は小さく息を吐くしかなかった。

「そうだからスキ。お前の父親から連絡がある」

「父さんから？」

和樹は父親からの伝言を聞くために斗貴子の方へ顔を上げる。

「『和樹が大変な事になったのはよく分かった。一応僕も用心棒を傭兵ギルドから雇ってみるよ、凄腕傭兵集団のメンバーだから期待しててね』だそうだ」

多分（と言うか確実に）父は間延びした声で言ったのだろうが、斗貴子はしっかりと伝言を聞かせる。

傭兵ギルドとは、主に退魔系の一族から放逐された凄腕の戦士達が築き上げた組織だ。トップランクの傭兵の実力は並みの名門術者をしのぐ程だと言う。

実は鍊金の戦士の中で鍊金戦団ではなく傭兵ギルドに所属している者（元信奉者など）も少なくないのは余談だ。

ちなみに一番有名な傭兵集団はある事件が切欠で有名になった民間軍事会社でもある「リトルウイング」と言う組織だが閑話休題。

「かゝずゝきゝさんゝゝゝゝ」

だがそこに1人の少女の声が響き渡る。彼女は勇敢にも、誰も踏み入ることができなかったストロベリー空間に足を踏み入れていく。さすがの和樹達もそれに気づいたらしく、視線をこちらに向けると冷や汗を流した。

「み、宮間さん……？」

「和樹さん！！ 昨日といい今日といい私という妻がいながら他所の女とストロベリーって……浮気ですか？ 浮気なんですね！？」

夕菜の腕に魔力が集められてくる。だがそこへ今度は扉が蹴破られ、更には聞き覚えのある声が響き渡った。

「しゝゝゝきゝゝゝもゝゝゝりゝゝゝ！！！」

その声の主はボロボロになった仲丸であり、今回はB組男子（一部除く）及び女子の大群を率いての登場だった。

しかも何人かは鍊金の戦士顔負けの殺意まで放っているではないか。それを見た凜と沙弓は忘れてたと言いたげな表情をして天を仰ぐ。

ちなみに夕菜は仲丸が扉を蹴破った時点で後頭部に扉が直撃してしまつて気絶している。

「貴様……何をやつたんだ！？ 何をどうすれば宮間さんの夫になつたり風椿さんや神城さん、杜崎に見知らぬ少女から言い寄られるんだ！？ しかも……しかも……！！！」

その声を合図に仲丸の両目から紅き物が流れる。それは明らかに血涙であつた。

「しかも拳句の果てには我が校一の美少女である八神輝のご主人様だとおおおおおお！　貴様、マジで何をした！？　八神さんにあんな事やこんな事をしたのか！？　貴様はハーレムでも作る気かああ！？」

『そつだそつだ！！』

『お前は俺らから夢を奪う気か！？』

『俺と代われ、いや、自分と代わってくださいよあ！！』

『どんな弱みを握ったんだ！？　兄貴と呼ばせてください！！』

『ひどいよ式森！！　僕だって君の事をこんなにも想っているのに……』

男たちは罵る人間とあわよくばお零れに預かろうとする人間に分かれ（最後の一部は聞かなかった事にする）――

『輝姉さまになにしたのよ肉欲獣！！』

『ああ、可哀相に。代わって上げられるなら私が身代わりになるのに……』

『お姉様のハジメテは私が貰うはずだったのにいい！！』

『こんな男に穢されるのならば、私が手を出しておけばよかった……』

和樹を追ってきた女子に至っては先日の凜や沙弓と同じ反応が返ってきた。それを見た和樹は斗貴子に向かってある質問をした。

「斗貴子さん。傭兵さんっていつ来るの？」

「少なくとも1週間以内だ」

それを聞いた和樹は頭を垂らした。目からは何か熱い雫が流れ出る。

「1週間だなんて長すぎるよ、僕は今来てほしいな……」
「……」

流石の斗貴子も眼前を見据える。

仲丸の奥にいる女性達は誰もが並みの戦士やホムンクルスを遙かに凌いでおり、学生として明らかにおかしい位だ。

と言うより、むしろスカウトしたい。

「さ、式森君。輝を犯した感想は？ トイレには行った？ 神様にお祈りは済ませた？ 部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？ 答えは聞かないけど」

殺意を放つ女子生徒に和樹は身体を震わせる。しかし和樹がその様な行動をしても彼女は助けてくれやしないだろう。

そして質問をした女子が右手の親指を下に向けた瞬間、仲丸を筆頭とした面々が飛び掛り――

「リーゼント殺法おおおおお！！」

聞き覚えのある声が仲丸たちの背後から響き渡り、仲丸たちB組生徒を吹き飛ばした。

「その声は岡倉！？」

和樹が声を上げると、人ごみの中にいるのであろう岡倉の声が響く。

「無事だったか和樹！　待ってるよ、今行く！！」

「仲間がいたのね？　だけどココで終わり——」

「死にさせええええええええええ！！」

再び誰かの声が響く。その声の主は雰囲気こそ違っても聞き覚えがある声。

「大浜まで!？」

その声を聞いたのかものすごい表情でこちらに突進してくる。

それに続いて岡倉や駒野に服部が大浜をサポートするかのよう
に駆けつけてきた。

「駒野に服部まで!？」

「……見殺しにして化けられてはたまらない」

「俺は師匠に見限られたくないっすからね」

駒野は淡々と、服部はあっけらかんと言いつつ、和樹は周囲を見回してある人物がいない事に気づいた。

「あれ? 六舛は……」

「くそっ!!! 式森を殺せ!!! 岡倉や駒野達は後でB組裁判でも仕掛けるぞ!!! 式森を殺せば「八神さんは俺のものだ!!! 真

夜中に俺の部屋に連れ込んであんな事やこんな事をしてやるぜ!!」
……は？」

仲丸の声(?)に仲丸の周囲の時間が止まった。すると女子生徒の一部が仲丸に向き直って聞いただす。

「……仲丸君？ 何か言ったかしら？」

「い、いや、俺は何も「やましい事は言っていない。当然の権利って奴だ。魔王を倒してお姫様を取り戻した勇者の特権って奴さ」って誰だあ!! 俺の声でデマを言いふらす奴は!!」

仲丸の叫びに対して凜と沙弓が動く。

凜の刀が仲丸の心臓部を、沙弓の腕が首を絞めるかのような体勢で動きを止めた。

「仲丸君。さっきからの暴言は私にとっても耳障りよ。その命、神様にでも返したらどう？」

「だ、だからそれは俺じゃないって……」

「安心しろ、答えは聞いてない」

沙弓と凜の攻撃を切欠に標的が変わり、その喧騒に紛れて今度は六舛がその姿を現した。

「あ、六舛」

「よつ。無事で何よりだ」

何事も無かったかのように六舛がいつもどおりに歩いてくる。そして和樹たちは六舛と合流し、これからの事を話し合った。

「あ、そうそう。当然って言えば当然だけど今日は休校だってさ。

帰りどこか寄る？」

「じゃあ、冴木先生のお勧めするカード屋行きたいからそこにいこっか」

「了解、じゃ行くつすよ」

そう言っただけで彼らは堂々と屋上から出て行き、校庭を通って外へ出て行った。

ちなみにその途中で仲丸が死んだ魚のような目をして自分の横を通り過ぎて行ったのは気にしないことにした。

一方、冴木春斗は輝と共にビルの階段を登って行って行きつけのカードショップ『』にたどり着いてから、店長に向かって声を上げた。

「いつもの奴の最新版を10パック」

春斗の声に対してサングラスと無精ひげの男は小さく口元で笑みを浮かべて、春斗が言う『いつもの奴』を10パック手渡した。
ちなみに輝はただカードを見ているだけである。

「いつもの奴ね……『竜王の眷属Ver.5』10パックで1500円よ」

だが店長はオネエ口調で春斗に向かって文句言いたげな表情をする。そして盛大なため息を吐いて春斗をにらみ付けた。

「一言言わせてもらおうよ？　いくら何でも同じのばかり買すぎよ。大体単品でも売ってつから店のためにそっち買って欲しいわね」

「生憎とこいつらが1番相性がいいから……兄貴なら全ての種族を使いこなすけどよ。それに単品は強い奴だと100万を余裕で超えるから家計を厳しくなっちまうが、これなら10パックでも1500円で済むし、いざとなったら金に変えてもらうさ」

「家は転売も返品も認めてないわ。後客の邪魔になるから隣の部屋で開けてよね」

千円札を2枚渡して硬貨を1枚もらう春斗。

そして彼は隣の部屋の椅子に座ってからデッキケースに閉まっていたカードプロテクターを取り出してパックを開けてから中身を見据える動作を繰り返し、9パック目を見終えてから盛大にため息を吐いた。

（……全部換金だな……このパックも潮時と言うわけか……）

このペースだと最後のパックも期待できそうにない。ため息を吐いて取り出した最後のパックの封を開け、カードを取り出す。

「ん？」

カードの名前が金箔で書かれていた物を見て、春斗は怪訝そうな顔をする。それを手に取ると彼は口笛を鳴らした。

「おつ、コイツは運がいい。単品だと高いんだよな……」

最後の最後で早速春斗は愛用するデッキケースの中に仕舞って再び店の中に入ろうとする。

「あ、冴木先生」

するとそこへ生徒である和樹がやって来たのだった。

話は少しさかのぼる。和樹たちは途中でまひろと合流して路地裏を通って目的のビルまでやってきたのだ。

「ココっすよ」

服部がビルを指差すと和樹は声を上げた。

「ヘー……ビルの中なんだ」

「カードの単品売りもやって決闘盤も売ってあるっすよ」
デュエルディスク

「決闘盤まであるのかよ……」

その話を聞いて岡倉は息を呑む。決闘盤と言うのは、デュエルモンスターズをよりリアルにプレイするために必要な器具の名前だ。

「あ、ちなみに師匠のは初期改修型クラシック・リメイクタイプっすよ。他のは腕に合わないって言ってたっす」

『初期改修型の決闘盤！？』

和樹たちは驚くがまひろは素直に感心していた。

真正正銘の初期型クラシックタイプの決闘盤は最新型のもとの違い、動力が魔術結晶を用いない充電式のもので、重さもあって外付けのオプションも装備できない物だった。

だが近年では当時決闘盤が流通しだした頃の人間を中心に軽量型に再設計し、魔術結晶を用いたりオプション機能も追加された初期改修型を使用している者もいる。購入者は再設計者達と同年代が中

心だが、それでも現に葵学園の卒業生でもあるプロ決闘者も初期改修型を愛用している1人だ。

「すごい。冴木先生ってベテランなんだ」

ちなみに初期型及び初期改修型の決闘盤はバトルシティのアレで、最新機種は5D'sの物をイメージしてくれればOKです。

「ま、師匠の話はこれまでです……5階だからエレベーター使うすよ」

服部がそう言うと和樹たちもビルに入りエレベーターに乗るが、最後に和樹が乗るとブザーが鳴り響いてしまった。

「店員オーバー……僕、階段を上って行くよ」

「オッケー。じゃ先に行ってるわ」

エレベーターの扉が閉じると和樹は階段を上っていった。2階、3階と上っていく中、5階に差し掛かったところで突然開かれた扉に顔をぶつけてしまう。

「うわっ!？」

幸い角ではなく平らなところだったから大事には至らなかったが、和樹が蹲っていると扉を開けたであろう人物の声が響く。

「すみません!! 大丈夫ですか!？」

その人物は慌てて自分の下へ駆け寄ってくる。和樹は胸ポケットから核鉄を掴みあげると額に手を当てながら答えた。

「あ、はい……大丈夫です……痛た……」

おいそれと傷が治るわけではない。だが一方で扉を開けた人物は何度も謝っていた。

「本当にすみませんでした。しばらく寝てたら待ち合わせに遅れそうになって慌てまして……」

するとその人物が跪いて和樹の方を見据える。

その人物は春斗と同じ白い髪を靡かせ、眼鏡を身に着けた人物だった。尤も、その眼鏡は漫画によくある『レンズが牛乳瓶の底の様なぐるぐるメガネ』であつたため、目つきとかはよく分からないが。

「本当に大丈夫ですか？ 病院に行った方がいいと思いますよ」
「あ、分かりました……じゃあ僕、急ぎますので！！ 僕は気にしていませんから！！」

そう言つて額を押さえながら和樹は店に入り、そして驚嘆の声を上げた。

「うわぁ……」

あまりのカードの多さに息を呑み、周囲を見回す。
自分の知ってるカードに見た事がないカードがガラスケースの中で輝いているようにも見える。

「あらここは初めて？ 歓迎するわよお」
「うわぁ！！」

そう言ってくねりながら声を上げる店長に驚く和樹。飛びのいた拍子に奥のほうの机に知り合いが1人座っているのが見えた。

「あ、冴木先生」

そう言って和樹は春斗に近づく。一方で春斗も和樹に気づいたのか少し慌てたような表情でこちらを見据えていた。

「式森か……どうかしたのか？」

「休校になったから冴木先生がよく行くカード屋に行こうって思いまして……」

「……そうか。ところで式森、お前は彼らのように見なくていいのか？」

和樹は店の中を覗くとそこには岡倉たちが様々なカードに目を配っている姿が見えた。

岡倉や大浜も興味津津そうに周りのショーケースを見ているではないか。

「じゃあお言葉に甘えて」

店の中に戻っていくが、和樹はカードを選ぶ以前に周りのカードを博物館で飾ってある展示品を見るかのようにただ見ているだけだった。

（目移りするなあ……）

まあ、まひろは強弱関係なしに可愛いもの系を集めるだろうし岡倉は強そうなカードを片っ端から入れるだろう。服部は忍者系を集めているみたいだし、残る三人は分からないがそのうち分かると思

う。

そんな中、見覚えのある人物がカードを見上げながら呆然として歩いている。それは津村斗貴子だった。

「あれ？ 斗貴子さん？」

「カズキか……」

呆然とカードを見渡す斗貴子だったが、遂にため息を吐いてしまった。

「……来てみたが私にはさっぱり分からん……」

どうやら彼女にはどれがどれだかさっぱりだったようである。だが一方で斗貴子は小さく息を吐いて強がりと言った。

「まあ、私は鍊金の戦士だ。こんなカード遊びに夢中になっている暇も時間もは無いな」

「あ、そう言えば桜花先輩も中学時代から結構嵌ってるみたいだよ。僕も休みとかしょっちゅう秋水先輩経由で誘われてるし」

その言葉を聞き、斗貴子の表情が強張る。そして彼女はレジへと向かい、レジの店員に向かって言い放った。

「初心者お勧めのデッキは？」

「手っ取り早く済ませたいならストラクチャーデッキを購入したらいいわね？ 今なら1000円だからお得よ」

「斗貴子さん。冴木先生に頼んでいないカードを分けてもらったらどうか？」

色々と言い合う中でまひろ達が合流する。そして彼らもまた隣の

部屋で和氣藹々と話るのであった。

これにてこの物語の導入部は幕とさせてもらおう。
これから彼には様々な試練が襲い掛かってくる。

最初に錬金術に関する物語の主人公…式森和樹にまつわる物語に
おいて必要不可欠とも言える男との物語を始めよう。

そう。彼とは切っても切り離せない……錬金術に関するあらゆる
因縁をも吹き飛ばすあの男との出会いを……

最終話 崩れ去る日常（後書き）

あとがき

ようやく序章編完結です。

まぶ錬編は決闘は外伝以外ではあまりやりませんが、カオシック
ルーンともクロスしている聖痕編はどうでしょう……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3801r/>

まぶ錬！！

2011年3月13日22時43分発行